

## 第2項 インタビュー調査結果のまとめ

表24のインタビュー調査の結果から、以下の5点が明らかとなった。

1点目は、男性の指導者と比較して女性の指導者に対しては、これまで指導を受けた印象としては概ね好意的であり、今回の調査対象者はあまり男性か女性かを意識していなかったこと。

2点目は、今回の女性コーチアカデミーの内容について、大変充実しており期待以上の満足度であったということ。

3点目は、今回の参加者は意外にSNS、特にFacebookについての利用者の割合が高く、SNSについての考え方や捉え方などについては世代での違いが顕著であった。

4点目は、今後の女性コーチや指導者を増やすにあたっての課題で「男性」や「パートナー」の協力の必要性を挙げていたことである。

5点目は、今回のインタビュー調査対象者を20歳代、30歳代、40歳代、50歳代と年代の違う4名としたが、内容としては特に年代による違いや特徴に顕著なものはなかったといえる。唯一3点目あげたにSNSに関しての利用状況や認識の違いに関しては年代による違いはあったといえる。

表24. インタビュー調査結果のまとめ

質問項目	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	
自分自身のスポーツキャリアに関して	1. スポーツキャリア (何をやってたか)	サッカーを (3歳~26歳迄)	小学3年~高校3年はバレーボール、大学からサッカー	4歳から34歳までバレーボール	中学1年から28歳までバレーボール
	2. 経験から得られたもの	・良い仲間に出会えたこと ・セカンドキャリアを常に考えられたこと	・バレーボールでの不思議な体験 ・自分からやる大切さ	人間力の大切さ	自分の人間形成
	3. 記憶に残っていること	大学4年の主将の	(仲間との) つながり	スランプを乗り越えた経験	羅密に考え大胆に行動する
	4. 現役生活は満足かどうか	満足は難しいかも	(バレーボールもサッカーも) 両方満足	満足です	ほぼ満足している
これまで指導を受けた指導者に関して	5. 指導者の男女比率	7~8人は男性指導者で女性は1人	バレーボールは全部男性、大学サッカーは女性	17年の中で9年が女性、8年が男性の半々	女性の数が3割で多い
	6. 男女の指導者の特徴等	・女性の良さは、女性に対して優しい、話しやすい ・男性はこれといって良さは無い	・女性は真面目で話しやすい ・男性は熱心に女性を指導してくれるらしい	・女性は、技術的にも精神的な部分も凄く細かい ・男性はおおらかで細かくない	男女の性差は無いように思う
	7. 女性指導者が少ない要因	女性指導者が増えることによるメリットを指摘する必要性	覚悟して指導者しないモチベーションが足りない	(スポーツ界は) まだまだ男性社会なんだと思う	男女の性差別が日本にはまだ(懸念ながら) あること
	8. 指導者として自身の苦労	・収入の不安 ・男性社会に合わせていかなければいけない意識	選手が怪我をした時が辛い	今は(指導者でない) のでない	若いころは浜山あつたが今は無い。女性コーチアスリートは子供産むとさびが一番辛い
女性コーチアカデミーに関して	9. アカデミーで良かったこと	・良いネットワークが作れた事 ・DISCやダイバーシティやリーダーシップなど	・山口善先生の講演が聴きたくて参加した ・プラスα期待以上に良かった	全てのプログラムが充実していた	・ワークショップがよかった ・自分自身の教育の面で広めていきたいと思った
	10. 他の参加者との会話	障害者スポーツの関係者と触れられてよかった	ネットワークが出来て、現場の話をしたり盛り上がった	(赤ん坊がいたので) 出来なかった	もっと広く知れる必要性を感じた
	11. 他の参加者の印象	エネルギーが強い人が多いなあ	年齢を重ねている指導者はどっしり喋っているなあ	凄く前向き、信念を持っていて、人間力を高めたい、意識レベルが高いなあ	・皆さん(女性指導者として) 悩んでいることは同じなのかなあ ・身振りの方と知り合えたこと ・今回のプログラムやセッションのされ方に「素敵さ」がある
	12. 参加して考え方の変化は?	・「気づき」が多かった ・他の国では議論されていることをやるのが日本のスタート	大きな変化はあまりなかった	女性アスリートについて男性コーチもしっかりと学ぶべき	今回のプログラムやセッションのされ方に「素敵さ」がある
	13. 受領後自分自身の変化は?	他の先輩と女性スポーツに対する日本とのギャップの関心を感じた	変わったことはなかった	・自分自身への理解が深まった ・すごく有意義だった	身体障害者スポーツへの認識などが自分の引き出しの中に入れたのには大きな変化
SNSの利用状況に関して	14. 参加を何人知っているか	ほとんど知らない	家族くらいしか知らない	家族の他はほとんど知らない	延べ人数で100人くらい
	15. どのようにして伝えたか	ゼミの先生にだけ口頭で伝えた	行った後にFBで100人位に発信した	友人とかには発信していない	全て口頭で伝えた
	16. SNSに關しての考え	・便利なツール ・自分が何をしているかを発信したい	「職人」がやるもの	ものによって全然違う用途と種類がある	SNSの意味が分からない
	17. SNSの良い点と悪い点は?	・良い点は早く情報収集できる事 ・注意点はどこまでプライバシーを発信するか	・良い点は、何人かと繋がる事が出来たこと ・悪い点は批判的な事を書く人がいること	・良い点は、人と人が繋がる素晴らしい ・悪い点は、それに付き合う面倒くささ	・良い点は、情報を一瞬で世界中に広める事が出来る ・悪い点は、見てほしくない人の目にも情報がいく
	18. SNSは何を利用しているか	Facebook, Twitter, ブログ	Facebookだけ	Instagram, Facebookは持っている	Facebookだけ
Facebookの利用状況	19. 利用しているのはPCか? スマホか?	パソコンとスマホと両方	スマホが多い	スマホだけ	要けたり長たりは携帯、発信はパソコン
	20. 一日の利用時間	7時間くらい	10分くらい	見るのは5分以内	トータル時間聞かない
	21. 利用上で意識していること	自分の情報開示をどこまでするか	批判的なこととか自分の自己主張はしない	ただのウォッチャー	・情報発信には注意をしている ・細かいプライベートに及ぶことには踏み込まない
	22. Facebookの一日の利用	Facebookには5時間くらい	一日10分くらい	あまり使っていない	ごく限られた方に発信している
	23. 友達登録は? 良い点と悪い点	・友達登録は850人くらい ・良い点は端的に何を言いたいか伝えやすい ・悪い点は情報伝達しやすいので注意が必要	・100人くらい	友達登録は20人くらい	・数では30代(100人以上) ・良い点は情報を一瞬で世界中に拡散できる ・悪い点は情報を見てほしくない人にも見られる
プロモーション活動に関して	24. 女性コーチアカデミーのFBは知っていたか	知っていた	知っていた	積極的にやっていないので知らない	Facebookの情報は後から知った
	25. 今後のプロモーション活動に大切な事	・「男性にもメリットがあるんだ」ということを食められると変わるかなと思う ・「女性指導者」というキーワードを出せば出すほど近寄りやすくなる	各競技団体や大学にも発信して、ポスター掲示などFacebookだけでは弱い	自分自身が積極的に取材などを受けること	
	26. 自分がインフルエンサーと云われることについて	有難いことだと思うし、責任を持ってやっていきたいと思う	影響力はあるとは思っているの、故に自己主張はせず、事実だけを伝えるように意識している	発言や行動が責任あるということに当たり前として生活してきた	自分をインフルエンサーとは考えていない。その定義なり違ひによる..
女性指導者に関する今後の課題	27. 自分が影響を受けた「インフルエンサー」は誰か	小笠原慎子さん、小林美由紀さん、中田英寿さん、有森裕子さん	両親	コーチであった母親	・母親であり特に父親 ・中学の時の体操の顧問の先生 ・大学時代の体操の恩師
	28. 女性指導者をもっと増やす活動とは	女性指導者以外の人に「女性指導者の重要性」をどう分かって貰うか	女性であれ男性であれ、選手に親身になって指導が出来るとのちからでもよいと思う	・メディアでの発言に責任があると思うのでそれを生かしたい ・女性の良さが表れる社会の実現	・授業やゼミ等を通じて広めたい ・「女性、女性」でなく男性が関わっていくこと
	29. 女性コーチの必要性を理解し知らしめるために必要な事	・海外の事例をFacebookに載せるとかは自分の出来る範囲でやっているという「気づき」を伝える	チームの中に女性のフィルターを入れる事	民間と政府がタッグを組んで開けた方向に持っていく必要性	女性も女性を支援したり、応援したり、堂かしたりという理解の必要性
女性指導者を増やす為のどのような方たちの理解が必要か	・女性指導者の必要性を理解している人が、政府組織にいないと厳しい ・協会の上の方のマインドを変えていくこと	(男性) パートナーの理解は絶対必要	「男性の年齢の方たちの理解」特に必要	政治だけでなく、両方の方の土壌を変えていき、良い育ちの人たちを増やすこと	

### 第3節 調査3 (Facebookの推移とメディア露出)の結果

#### 第1項 Facebookの推移とまとめ

表25は、女性スポーツ研究センターの協力を得て、女性スポーツ研究センターのFacebookページの状況を女性スポーツ研究センターが設立された2014年8月1日から2015年11月末日までをまとめたものである。

表25. 女性スポーツ研究センターが発信したFacebookの「いいね!」と「シェア」の推移(1)

公開年月日	いいね! 数	シェア 数	Facebookのトピックス
2014 8 1	8	0	女性スポーツ研究センター設立 ロゴマークについて 中央を走る曲線は、女性アスリートの基礎体温から着想を得たものです。この曲線は、アスリートとして常に上を目指しさらなる高みを目指す女性の願、また、ベストパフォーマンス後の女性アスリートの歡喜の瞬間を表しています。
2014 9 1	12	0	平成26年9月1日(月)、女性スポーツ研究センター設立記者発表会を実施し、今後の取り組みや、将来的なビジョンおよびセンターにおける研究内容について説明を行いました。
2014 10 5	5	0	女性アスリート外来予約受付中! 順天堂大学医学部附属 順天堂医院・浦安病院にて、女性アスリート外来の予約受付がスタートしました。女性アスリート外来は、女性アスリートが長期的に高い競技力を継続できるよう、婦人科・整形外科・栄養科学の面から総合的に支援する日本初の取り組みです。両院の予約方法等の詳細情報につきましては、下記サイトをご覧ください。http://www.juntendo.ac.jp/athletes/news/20141001-01.html
2015 1 20	0	0	2014年11月1日(土)、順天堂大学スポーツ健康科学部 オープンキャンパス2014において、女性スポーツ研究センターで実施している研究・活動等を紹介する公開講座を行いました。池畑亜由美研究員(スポーツ健康科学部 非常勤助教)が「女性アスリートのサポートに必要な知識と情報」というテーマで女性アスリートのコンディショニングについてわかりやすく講義しました。
		0	2014年10月17日のSPORTS JAPAN GATHERに女性スポーツ研究センターの鯉川なつえ副センター長(順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授)のインタビュー記事が掲載されました。http://www.sjgather.com/news.php
		4	2014年10/29日に女性スポーツ研究センター 小笠原悦子センター長(順天堂大学 大学院スポーツ健康科学研究科 教授)のインタビュー記事がCSParkに掲載されました。http://cs-park.jp/column/detail/id/548
2015 1 29	15	1	大病院に開設された「女性アスリート専門外来」 http://www.healthcare.omron.co.jp/resource/.../topics/138.html 2014年11月25日にオムロンヘルスケアで、女性スポーツ研究センターの鯉川なつえ副センター長(順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授)監修の記事が掲載されました。
		7	1 LaVoi to receive Special Merit Award from Minnesota Coalition of Women in Athletic Leadership January 26, 2015 - See more at: http://news.cehd.umn.edu/lavoi-to-receive-special-merit-award-from-minnesota-coalition-of-women-in-athletic-leadership/#sthash.Y4G0vfdm.dpuf
		8	1 New A Women's Football League? The Indian women's football team has better performances, and a better FIFA ranking, than their male counterparts. Those are good enough reasons for the All India Football Federation (AIF), to start an ISL-like league exclusively for women, hopefully this year. Pune FC has become the first club to conduct trials for the same.
2015 1 30	9	1	澤穂希選手がFIFAワールドカップや女子サッカーについて、日本語でインタビューに答えている動画です。
		8	1 順天堂大学出前授業「女性スポーツから未来を切り拓く」：募集中の出前授業：出前授業：読売教育ネットワークkyoiku.yomiuri.co.jp 読売教育ネットワークの出前授業に、女性スポーツ研究センターが協力させていただくことになりました。 女性スポーツ研究センター 出前授業http://kyoiku.yomiuri.co.jp/dem.../boshu/contents/post-226.php 読売教育ネットワークとは※出前授業の応募には参加登録が必要です。http://kyoiku.yomiuri.co.jp/network/
2015 2 2	16	0	カナダ女性スポーツ振興協会(CAAWS: Canadian Association for the Advancement of Women and Sport and Physical Activity http://www.caaws.ca/)の理事長(Executive Director)であるカーリン・ロフストロム(Karin Lofstrom)さんが、「女性スポーツ研究センター(JCRWS)」を訪問してくださいました。 日本における女性スポーツのあり方について熱く語り合い、情報共有・交換を行いました。
2015 2 5	10	0	2月3日、独立行政法人日本スポーツ振興センター(JSO)主催により「女性スポーツ指導者カンファレンス」が開催されました。特別講演をされたカーリン・ロフストロム CAAWS(カナダ女性スポーツ振興協会)理事長のメッセージが紹介されています。
2015 2 12	35	2	2月14日(土)開催予定の「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」ですが、定員に達したため、お申込を締め切らせていただきました。たくさんのお申込をいただき、ありがとうございました!
2015 2 14	87	14	多くの参加者にお集まりいただき、「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」を開催させていただきました! 国内外の女性リーダーの方々が一堂に会し、最新情報を共有しました。そしてスペシャルなパネリストの方々のディスカッションは見ごたえ満点でした。ご参加いただきました皆様、素晴らしいパフォーマンスをしてくださったスピーカー・パネリストの皆様、本日は誠にありがとうございました! 参加者の方それぞれが熱意、勇気を与え合えた、そんなカンファレンスになったと思います。Go Women!!!
2015 2 16	15	1	毎日新聞記事 Yohoo! ニュース 女性スポーツ指導者像を考える 杉山愛さんに意見交換
2015 2 18	6	0	0 獲ても覚めても「自立」と「分業」=富重圭子(毎日新聞) キーワードは「自立」と「分業」であるらしい。バレンタインデーに順天堂大学女性スポーツ研究センターが開いた会議のテーマは、どうすれば日本スポーツ界に女性の指導者が増えるか、だった。
		45	13 女性スポーツ研究センターが発信する情報サイト Women in Sports(女性スポーツオンライン)を開設しました! このサイトでは、女性アスリートやその指導者、保護者の方に、ぜひ知っていただきたい情報をコラム形式で分かりやすくお届けします。女性アスリートのコンディショニング、リーダーシップ、スポーツ栄養の基礎知識や海外現地レポートなど、さまざまなトピックスを紹介していきます。ぜひご覧ください! http://www.juntendo.ac.jp/athletes/portal/

表25. 女性スポーツ研究センターが発信したFacebookの「いいね！」と「シェア」の推移(2)

2015	2	24	69	5	国際サッカー連盟(FIFA)理事のモヤ・ダッドさんが、順天堂大学にお越しくださいました！モヤさんは、「女子サッカー 発展のための10の重要方針(Women's football - 10 key development principles)」の起草・採択に携わった人物です。また、元オーストラリア代表のサッカー選手であり、シドニーの法律事務所所属する弁護士でもあります。 女性スポーツ研究センター小笠原悦子センター長、鯉川なつえ副センター長とたくさんの情報を共有、これからの友好を約束し、順天堂大
				13	4 東京五輪・パラリンピックを5年後に控え、日本における女性コーチの在り方を考える「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」は2月14日、多数の方にお集まりいただき大盛況のうちに終了しました。欧米で先行する女性コーチやリーダーに向けた取り組みを、プログラムの責任者から直接伺って世界の流れを知り、その後、日本を代表する女性トップコーチたちがパネルディスカッションするという刺激的な内容でした。
2015	2	24	34	5	「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」の開催報告を女性スポーツ研究センターWebサイトにアップしました。カンファレンスの内容や写真を多数掲載しております。どうぞご覧ください！
2015	3	18	15	4	女性スポーツオンライン 記事 スポーツをする上で知っておきたいのが、自分の身体のこと。女性の場合は特に、女性特有の身体の機能や特徴をよく理解し、対処する必要があります。そこで今回は、男性との身体の違いや女性ならではの特徴について、鯉川なつえ順天堂大学スポーツ健康科学部先任准教授(女性スポーツ研究センター副センター長)にお聞きしました。
2015	4	1	14	5	女性スポーツオンライン 記事(ライター 佐藤温夏) 女性アスリート外来 設立ものがたり1 あまりに多かった「無月経」のアスリート 2014年8月、「女性スポーツ研究センター」の設立からほどなくして、日本で初めての女性アスリートを専門に診察する「女性アスリート外来」が、順天堂大学医学部附属順天堂医院と同浦安病院内に開設されました。
2015	4	7	8	1	女性スポーツオンライン 記事(鯉川 なつえ 順天堂大学スポーツ健康科学部先任准教授 同大陸上競技部女子監督) 女性アスリート外来 設立ものがたり2 無月経や疲労骨折…。女性アスリート特有の症状を診る 「女性アスリート外来」のコンセプトは、「女性アスリートが健康で長期的に高い競技力を継続できるように、医学的側面から総合的に支援」すること。対象年齢に制限はなく、ジュニア期から、たとえば趣味でランニングをしている高齢のジョガーまで、幅広い層の女性アスリートを受け入れています。
				24	4 女性スポーツオンライン 記事(ライター 井上 好) 全米の大学スポーツ女子チームにおける、女性コーチ(監督)の割合がどのくらいご存知でしょうか？今年2月、全米女性スポーツ研究機関のバイオフィア的存在であるタッカーセンターより、最新の調査結果(2014-2015年シーズン*1)が報告されました。
2015	4	28	17	3	オムロンヘルスケア「健康コラム」に、櫻庭景植 順天堂大学スポーツ健康科学部 教授(女性スポーツ研究センタープロジェクトメンバー) 監修の記事が掲載されました。 未成年のアスリートも対象。「ドーピング」の最新事情 2015年1月、すべてのスポーツの基準となる世界アンチドーピング規程で、未成年のアスリートに関する要件が改定されました。未成年のアスリートもドーピング検査の対象となり、競技会に参加する場合には観戦者の同意書が必要になっています。
				47	4 「女性コーチアカデミー2015」応募資格発表！ 2015年9月15日(火)～9月17日(木)、2泊3日で開催予定の「女性コーチアカデミー2015」への応募資格を発表させていただきます。
2015	5	13	59	6	順大 女子7人制ラグビーチームを多角的にサポート 女子7人制ラグビー社会人チームに講義する池畑研究員(右) 将来の五輪選手を科学的・心理的にサポート——。順天堂大学女性スポーツ研究センター「は5月7日、女子7人制ラグビー(セブンズ)の社会人チームに「女性アスリートの健康を守る」「女性スポーツリーダーシップ」などをテーマに出前授業を行った。
2015	5	28	52	29	「女性コーチアカデミー2015」Webサイトを公開しました。女性コーチアカデミーの詳細についてはこちらのリンクをご覧ください。応募受付は、6月1日より開始します。ぜひご覧ください 「女性コーチアカデミー」とは、トップコーチを目指す女性のために、科学的研究に基づいたコーチ教育・トレーニングを提供します。プログラムには、ワークライフバランス、ダイバーシティマネジメント等、選手とともに頂点を目指す女性コーチに欠かせない視点が盛り込まれており、スポーツ指導者に向けた従来の様々な講習とは大きく異なります。また、キャリア形成をサポートするネットワーク構築の機会を設け、さらに、スポーツの枠を超え、国内外の組織からメンターとなる人材を紹介します。日本から世界に羽ばたく女性コーチを支援する「日本初」の取り組みです。
2015	6	5	20	13	女性スポーツオンライン 記事(福 典之 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康医科学研究所准教授) 遺伝子研究により女性スポーツの競技力向上は可能か？ スポーツ界でも遺伝子の研究が進み、競技力に影響がある遺伝子型も明らかになってきました。女性スポーツセンターでも、この分野の第一人者、順天堂大学の福典之准教授が研究に取り組んでいます。遺伝子研究がすすむと、スポーツ選手にとってどんな未来が待っているのでしょうか。
2015	6	16	13	2	女性スポーツオンライン 記事(ライター 井上 好) 「2015 Women Coaches Symposium」参加レポート その1 概要 2015年4月17日、アメリカ・ミネソポリス市TFCバンクスタジアム(アメリカンフットボール場)クラブルームにて「第2回女性コーチシンポジウム(2015 Women Coaches Symposium)」が開催されました。このシンポジウムは、昨年度の第1回大会での成功と反響をふまえて年次イベントとされ、タッカーセンター、ミネソタ大学ゴopherアスレティクス(University of Minnesota Gopher Athletics)、および米国女性コーチアライアンス(Alliance of Women Coaches)の共催により運営されています。
2015	6	22	37	5	女性アスリート外来 Up to Date (情報交換会)開催のお知らせ このたび、順天堂大学医学部附属順天堂病院・浦安病院女性アスリート外来、女性スポーツ研究センター(JCRWS)共催により、「女性アスリート外来 Up to Date (情報交換会)」を7月11日に開催させていただくことになりました。 順天堂大学医学部附属順天堂病院・浦安病院では、昨年10月より「女性アスリート外来」を開設し、女性アスリートが長期的に高い競技力を継続できるよう、産婦人科・整形外科・栄養科学の面から総合的に支援する取り組みを行っておりますが、約半年間の診療を経て、全国で診療をされている産婦人科等医師の皆様との連携の必要性を感じているところです。つきましては、下記の通り、女性アスリートの診療に携わる医師の方々とは情報共有をいたしたく、情報交換会を開催いたしますので、ご参加いただけますと幸いです。
2015	7	6	21	7	女性スポーツオンライン 記事(ライター 野口 亜弥) ザンビアの女性スポーツNGOを知っていますか？ アフリカ南部に位置するザンビアのことを、みなさんほどのくらいご存知ですか？ザンビアの女性とスポーツの現状や課題といった情報についてはいかがでしょうか？ 2015年1月から約半年にわたり、ザンビアの女性スポーツNGO(非政府組織)であるNOWSPAR(ナウスパ)でインターンシップをした経験を活かし、これから、みなさんに様々な情報をお伝えしていきます。初回は、NOWSPARのご紹介です！

表25. 女性スポーツ研究センターが発信したFacebookの「いいね！」と「シェア」の推移(3)

2015	7	15	38	6	2015/07/15朝刊の日経新聞に女性スポーツ研究センターの記事が掲載されました！ 順天堂大女性スポーツ研究センター 女性競技者の能力向上 東京・御茶ノ水駅近くに日本初の女性アスリート研究拠がある。順天堂大学が2014年8月に設立した女性スポーツ研究センターだ。女性競技者のコンディショニング管理と、彼女らを取り巻く環境整備を支援。競技能力の向上と併せ、スポーツ界で息長く活躍できるようにするのが狙いだ。
2015	7	24	32	5	女性スポーツオンライン 記事(鈴木 志保子 神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部栄養学科 教授) 女性アスリートのからだの特徴と栄養・食事管理① 省エネな身体 競技選手への競技力向上のための栄養サポートに関する研究などを行う。主な著書に「基礎から学ぶスポーツ栄養学」「基礎から学ぶスポーツシリーズ」などがある
2015	7	30	37	8	女性スポーツオンライン 記事(ライター 佐藤温夏) 女性アスリート外来 ～開かれた「チーム医療」を目指して 順天堂大学医学部付属順天堂医院と、同浦安病院内に2014年10月、女性アスリート外来がオープンしました。開設以来、多くの人が訪れていますが、実際にどのような人が受診し、どのような診療が行われているのでしょうか。産婦人科医である北出真理順天堂大学医学部准教授(女性スポーツ研究センター副センター長)にお聞きしました。
2015	8	4	21	1	女性スポーツ研究センターのプロジェクトメンバーである、萩裕美子教授(東海大体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科)の記事が掲載されました！ 「体を動かさないと60～70代にツケがまわる」 みなさんは日常生活の中で体を動かしたり、スポーツを楽しんだりしているでしょうか。この連載では、中高年が美しくより快適に生きるため、スポーツ医学の視点から健康な体づくりに役立つ最新情報をお届けします。ご協力いただくのは、女性アスリートが常に最高の状態で競技に臨めるよう、コンディショニング管理について研究している「順天堂大学女性スポーツ研究センター」のプロジェクトメンバー。第1回はエクササイズと健康について、東海大体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科教授の萩裕美子さんに聞きました。【聞き手＝医療ライター・阿部厚香】
2015	8	24	24	3	女性スポーツ研究センターのプロジェクトメンバーである小林弘幸教授、副センター長である北出真理准教授が司会を務める「第55回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会」市民公開講座が「月経の問題を考える」と題して開催されます。参加費無料、どなたでも参加いただけますのでぜひご参加ください。 日時：2015年9月12日(土)15:30～17:00 会場：パシフィコ横浜 会議センター5階 503 司会：順天堂大学総合診療内科教授 小林弘幸 順天堂大学産婦人科学准教授 北出真理
2015	8	26	12	4	「女性コーチアカデミー2015」取材の受付を開始しました！ 報道関係各位 平素よりご理解ご協力を賜り、心より御礼申し上げます。このたび、女性スポーツ研究センターは、日本で初めてとなる読みとしまして、女性の指導者と元アスリート等を対象にした「女性コーチアカデミー2015」を開催いたします。
2015	9	4	23	4	免疫をアップさせる食事と運動とは 中高年になると病気にかかりやすくなります。換気になりにくからだづくりの壁を突破するのは、自律神経と腸内環境。すなわち、食事と運動が健康を左右するといわれています。年齢を重ねても元気で生きるには、どうしたらよいのでしょうか。「順天堂大学女性スポーツ研究センター」のプロジェクトメンバーで、腸内環境を研究しトッパアスリートにも指導している同大学医学部付属順天堂医院の小林弘幸教授に聞きました。
2015	9	16	120	16	女性コーチアカデミーが始まりました！ 1日目。 素晴らしい女性コーチたちが集結！ 日本が変わっていく、変えていく第1歩を踏み出します！
			66	3	女性コーチアカデミー！ 2日目前半。自分と向き合い、仲間と向き合っています！
			78	13	女性コーチアカデミー！ 2日目後半。頭に、心に、響きまくるセッションが続きました！
2015	9	17	147	15	「女性コーチアカデミー2015」3日目(最終日・修了式)。 自ら立てた目標に向かい、自分たちにできることを、仲間と共に実現していくことを誓いました。 女性コーチアカデミー1期生は、素晴らしい仲間、講師との出会いを大切にしていきます！
2015	10	13	21	3	女性スポーツオンライン 記事(ライター 野口 亜弥)『SHE LEADS ～ザンビアの女性リーダーネットワーク』
2015	10	14	35	13	順天堂大学スポーツ健康科学部公開講座のお知らせ(11.1さくらキャンパスにて開催予定)：麗川なつえ准教授が講師
2015	10	19	53	12	9月15日～17日に開催された「女性コーチアカデミー2015」,その実施報告ページが、女性スポーツ研究センターのホームページで公開
2015	10	23	16	2	女性スポーツオンライン 記事(ライター 井上 好)『大学スポーツの在り方の違い』 全米における大学スポーツとは
2015	10	27	23	2	毎日新聞「医療プレミア」に女性スポーツ研究センタープロジェクトメンバーである石田 良恵 女子美術大学 名誉教授監修の記事が掲載
2015	10	31	6	0	明日(11/1)、13:00から順天堂大学スポーツ健康科学部(さくらキャンパス)にて、「順天堂大学スポーツ健康科学部公開講座」を初公開させていただきます。麗川なつえ准教授が講師
2015	11	6	13	2	女性スポーツオンライン 記事(ライター 野口 亜弥)『ザンビアの少女と女性に人気のスポーツ』 ザンビア国内において、女性と少女に最も人気のあるスポーツは「ネットボール」です。
			36	2	女性スポーツ研究センターの講師が「出前授業」を行ないました。 読売教育ネットワークが主催し、企業や大学が小中学校などに講師を派遣する「出前授業」。佼成学園女子中学校高等学校(東京都世田谷区)で行われました。
2015	11	9	24	3	順天堂大学オープンキャンパス 2015で公開講座を行いました 11月1日(日)、順天堂大学スポーツ健康科学部 オープンキャンパス2015において、「成長サポートを見逃すな～女子アスリートのヘルスサポート～」と題した公開講座を行いました。
2015	11	11	35	4	東京中日スポーツ2015年11月11日(首都スポ)紙面から 順大女性スポーツ研究センター長・小笠原悦子さん語る(フリージャーナリスト・幸仁夏)
2015	11	18	10	2	女性スポーツオンライン 記事(ライター 野口 亜弥)『Sport For Hope』プログラム～途上国の若者に希望を！ ザンビアの首都ルサカ

累計数 1603 255

このFacebook 上での「いいね！」と「シェア」に関してだが、この2つには大きな違いがある。Facebook の「いいね！」と「シェア」ボタンの違いは、ソーシャルメディアの拡散力にも影響してくる。最初に「いいね」ボタンであるが、シンプルに「良い！」「共感した！」という意思表示するのが、「いいね！」ボタンである。一方、「シェア」は、リンクや画像付きの情報で、「この情報、自分の知り合いにも広めたいとか共有したい」と思ったときに使用するのが、「シェア」ボタンである。これは自分のコメントを付けて情報を送ることができ、登録している友達全員はもちろん、情報を広める相手を自分で選択することも可能である。例えば誰か(A)が、Bさんの記事を「シェア」すると、「Aさんの友達のニュースフィード」と「Aさんのタイムライン」に流れる。このタイムラインは、日記帳のようなものであるが、過去に遡っても閲覧されたりする可能性が高くニュースフィードより露出も高くなる。このように「タイムライン」に表示される分、「シェア」の方が長期間、色々な人の目に触れられる可能性が高く、ソーシャルメディア上で拡散(バズ)されやすくなる。この違いは情報の「拡散範囲」だ。「いいね！」よりも「シェア」するほうが拡散範囲が広くなるということになる。

本研究では統計上、「いいね！」数の多かった投稿、「シェア」件数の多かった投稿をデータより抜き出すと、「いいね！」の数は、以下の順となった。

1. 女性コーチアカデミー始まりました！ 1日目。素晴らしい女性コーチたちが集結！日本が変わっていく、変えていく第1歩を踏み出します！(120)
2. 多くの参加者にお集まりいただき、「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」を開催させていただきました！国内外の女性リーダーの方々が一堂に会し、最新情報を共有しました。そして、スペシャルなパネリストの方々のディスカッションは見ごたえ、聞きごたえ満点でした。ご参加いただきました皆様、素晴らしいパフォーマンスをしてくださったスピーカー・パネリストの皆様、本日は誠にありがとうございました！参加者の方それぞれが刺激、勇気を与え合えた、そんなカンファレンスになったと思います。Go Women!!!(87)
3. 女性コーチアカデミー 2日目後半。頭に、心に、響きまくるセッションが続きました！(78)

次に「シェア」の件数で多かったのは次の2つであった。

1. 「女性コーチアカデミー2015」Webサイトを公開しました！女性コーチアカデミーの詳細についてはこちらのリンクをご覧ください。応募受付は、6月1日より開始します。ぜひご覧ください！5月28日(29件)
2. 女性コーチアカデミー始まりました！ 1日目。素晴らしい女性コーチたちが集結！日本が変わっていく、変えていく第1歩を踏み出します！9月16日(16件)

図35は、「女性コーチアカデミー」への反応は多いという結果であり、女性スポーツ研究センターの投稿に一定数がみられるようになった2015年1月から、2015年11月末日までの投稿について、月ごとの一投稿あたりの「いいね！」平均値の推移を示したものである。

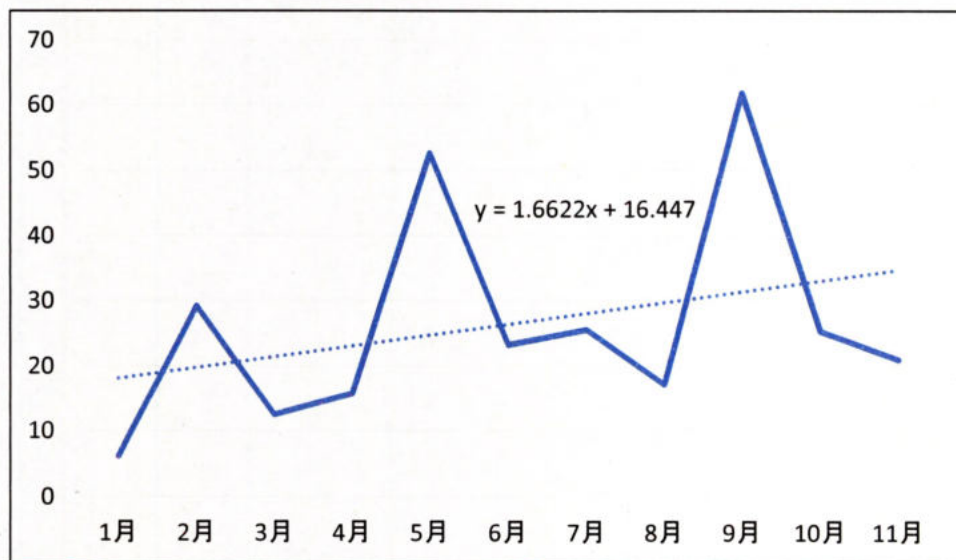


図35. 月ごとの一投稿あたりの「いいね！」平均値の推移

これを見ると、点線で示される近似曲線が右肩上がりになっている。この期間（2015年1月から11月）では、女性スポーツ研究センターの投稿への「いいね！」数は順調に増えてきていると考えられる。この図35では3つの山が見られるが、この山にはそれぞれ以下のようなトピックスがあった。2月には「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015、FIFA理事のモヤ・ダッドさんが順大に来る」、5月には「読売系主催の『出前授業』に順天堂大学の小笠原先生が出向、女性コーチアカデミー2015の情報が出てくる」、9月は「女性コーチアカデミー2015の開催」という話題で「いいね！」が増えていたことを示している。

## 第2項 メディア露出

「女性コーチアカデミー2015」のメディア露出に関しては、各メディアに対しても「女性コーチアカデミー」の取材案内を「女性スポーツ研究センター」から2015年8月26日付けで首都圏の媒体社にメールにて送っている。今回開催地が「長野県・軽井沢」であったという地理的な問題もあり、新聞記者の同行取材はあったものの、テレビクルーによる取材は入らなかった。結果として今回取材媒体は主に新聞社が中心となったが、その露出時期は9月の終了直後に集中されるのではな

く、2015年12月までに間隔が空きつつも露出され続けていった。その新聞露出内容については以下のようにになっている(添付資料C)。

1. 毎日新聞(2015年2月15日 夕刊)「女性指導者の将来像は」
2. 毎日新聞(2015年2月17日 夕刊)「『自立』と『分業』」
3. 毎日新聞(2015年2月20日 夕刊)「順大がアカデミー開設 育て女性指導者 資質向上へ初の試み」
4. しんぶん赤旗(2015年9月24日)「女性コーチ育成へ講座 コーチング・性格分析・体調管理学ぶ 初の試み」
5. 読売新聞(2015年10月15日 夕刊)「杉山愛さん 指導者へ奮闘 大学院、研修会で勉強中」
6. 東京中日スポーツ(2015年11月11日 首都スポ)「小笠原悦子さん 女性スポーツ発展へ信念曲げず突き進む」
7. 朝日新聞(2015年12月2日 朝刊)「NBA NFL 女性コーチ奮闘 日本では取り組み徐々に」



## 第5章 考察

### 第1節 調査1 質問紙調査結果からの考察

本研究における質問紙調査の結果から、今回の参加者は、20歳代8名、30歳代10名、40歳代12名、50歳代2名とこれから活躍を期待される世代を中心としたバランスの良い構成となっており、大学の指導者を中心にアスリート時代の競技レベルの高さが伺われる集団で構成されていた。

その中でも、パラリンピックの現役選手、コーチなど障害者スポーツ関係者が3名参加していたことは、障害者スポーツにおける女性指導者への意識の高まりを裏付けると考えられる。

アカデミーへの期待という点では「ネットワーク作り」、「情報共有」、「女性も社会進出の機会を増やす」などの積極的な記述が多く、女性指導者（コーチ）が置かれている日本のスポーツ界の現状が垣間見え、何とか現状打破を図りたいというのが参加者の共通認識と考えられる。

また、「女性コーチアカデミー」の活動や考え方について、それに対する「共感度」を聞いた6つの設問においては他の4つと異なった結果が得られたのは、まず「女性コーチが女性アスリートを指導できる環境を作る」という設問で、大いに共感するは63%に止まって、共感するが27%、やや共感するとどちらでもないとの合計が10%となり、他の結果との違いが明らかであった。これは、今回の参加者は「女性コーチを増やすということには共感するが、何も女性だけにこだわる必要もなく、男女共に優秀なコーチを育成すべきだ」というような考えや「自分自身が女性アスリートとして競技を終え、現在も女性アスリートを指導できる環境下に置かれていて、他の要因に比べて共感度合いが低い」というような考えを持った参加者の存在を示唆するものと考えられる。

そして、「女性のスポーツ参加を阻害する社会的要因を解消していく」の設問においては、大いに共感するは43%とより少なく、共感するが40%、やや共感するとどちらでもないがそれぞれ7%であった。この設問のみが「3. あまり共感しない」という参加者も存在した。社会的阻害要因の解消の必要性は他の項目と比較してあまり感じていないという参加者の割合が多かったということとなる（図26）。これは、参加者自身自分の周りの環境において「社会的に阻害された状況に置かれていない」とも推察される。また、参加者の中にはこれまでの競技キャリアの中で、女性アスリートとして恵まれた環境に置かれていた、あるいは本来なら女性にとって阻害要因となるものが、一定の順調なキャリア形成をしてきた女性アスリートには認識されない、無意識的にそれらの阻害要因が、周囲のサポート等により取り除かれていたからであると推察される。

ここで、今回の参加者のSNSの利用者を少し分類してみた結果、Web上のコミュニケーションでは、情報の受信と発信を行う「アクティブ・ユーザ」と、受信のみを行う「リード・オンリー・メンバー」（以下、ROM）が存在した。認識として、Web上では情報の発信よりも受信の方が難易

度としては容易である。今回の結果を見ても、Q2. C. の回答4つに関しては、すべての回答者が「② 他人の SNS の記述を読むことについて」に最も高い値をつけており、設問①や③、④が設問②よりも高い値となっている人はいない。

②には、「2. あまり読まない」を付けている人と、「4. たまに読む」または「5. 積極的に読む」を付けている人がいるので、両者を分類したのが図 36 である。SNS を利用している 25 人のうち、2 を付けた 2 名は、SNS をほとんど利用していない人といえる。次に、4 または 5 を付けた 23 名は、「①自分が SNS に書き込む頻度について」を使ってさらにグルーピングする。23 名のうち、①にも「4. たまに書き込む」または「5. 頻繁に書き込む」を付けた人が 15 名、「1. 全く書き込まない」または「2. 殆ど書き込まない」をつけた人が 8 名となる。この場合、前者がアクティブ・ユーザ、後者が ROM となるが、これを図示すると以下のようなになる。

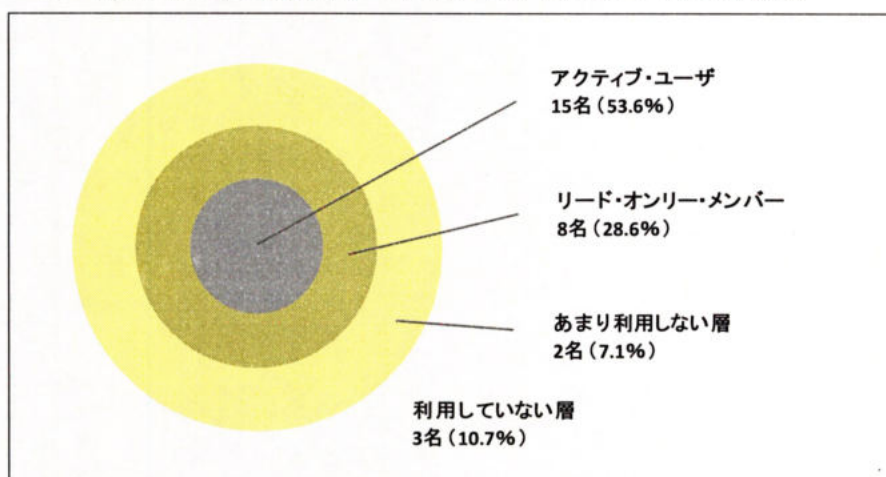


図 36. SNS のアクティブ・ユーザとリード・オン・メンバーの関係図 (筆者作成)

これが、さらに集団が大きくなると、アクティブ・ユーザが厳選され、多くの人が ROM に回る傾向や集団内に小さな集団が出来上がったりする。それを考えると、メンバーの半数以上がアクティブ・ユーザであることは、SNS に関してかなり活発な集団だと考えられる。情報処理機構 (IPA) が 2015 年 2 月に発表した 2014 年度情報セキュリティの倫理に関する意識調査の調査報告書 (n=3500) によれば、アクティブ・ユーザは 38.7% であり、閲覧のみで、投稿はしたことがない、ROM は 47.1% となっておりこれは 2013 年 9 月の前回調査より 12.8% も増えている。

一見すると今回のアカデミー参加者はオピニオン・リーダーとしての性格が強くみられそうだが、意外と個人的な、密な関係を持っているのかもしれないとも考えられる。特に小さい集団は、凝集性が強くなる傾向がある。今後、SNS でのプロモーション戦略を考える際には、これらの層にそれぞれアプローチをする必要があると思われる。

また今回の参加者が使っている SNS の種類に関しては Facebook が 79.3% (23 名) と圧倒的で、ついで Instagram の 24.0% (7 名)、Twitter の 13.7% (4 名) となる (複数回答可のため)。総務省が 2015 年に発表した資料「2014 年のソーシャルメディアの利用率」(図 16)によれば、Facebook が 35.3%、Twitter が 31.0% という利用率の結果とは大きく異なっている。このように、今回の参加者の Facebook の利用率がかなり高いことの理由については明らかではないが、Facebook は実名登録が大前提というのが最大の特徴で、現実世界での知り合いとより深く繋がれるツールとして使われているということから、今回の参加者は「女性スポーツ」あるいは「女性指導者」といったキーワードで普段からより深い繋がりを求めるような参加者が多かったと思われる。

最後に、参加者の SNS の利用状況と女性コーチアカデミーの情報発信への意欲についてである。参加者の女性コーチアカデミーの情報に関する「発信意欲」を参加前と参加後の変化で聞いた設問では大きな変化がみられた。「友人、同僚、知人」に対しての発信意欲だけが若干減少しているものの、他の SNS サイトで大学の授業、セミナーや講演会などでの発信意欲も増加し、何と云っても「指導しているスポーツ団体の活動中に」という答えは、参加前は 33% (10 名) だったのが、参加後は倍以上の 77% (23 名) に飛躍的に増加したのが特徴である。これは、参加者の満足度にも関係すると考えられるので、多くの参加者がプログラムに対してかなりの満足度を得たことがこのような結果になったと推察される。

## 第 2 節 調査 2 インタビュー調査結果からの考察

今回のインタビュー調査においては、20 歳代から 50 歳代までの年齢世代別に行った。女性指導者については、「これまでは (女性ということ) 意識していなかったが、(今回参加したことで) 女性指導者ということ意識させられた」というものや、女性指導者の良い点は多く上がったが、男性指導者の良い点についての発言がほとんどなかったということでは、指導者として女性の方が好意的に受け入れられているように思われる。しかし、日本の現状ではまだ「男性指導者」の絶対数は多いことを考えると、このように「女性」のみを対象としたものとは別に女性コーチアカデミーの男性教育版なども必要であると考えられる。

また、SNS については今回の参加者はかなり忙しい人々であるが、それを使ったり情報発信することへの意識は高かったということを見ると、今回の参加者への「女性スポーツ研究センター」からの継続的な情報提供と、「シェア」してもらうことによる情報拡散を意識してもらうことも必要である。

そして、今後のプロモーション活動には、今後の課題として「男性にも（女性にも）女性指導者が増えることのメリット」を伝える事が大切になってくる。日本においては、まだ経済的には男性依存傾向は高く、結婚するとなると、女性は男性の仕事環境などに大きな影響を受けやすい。それが、女性の地位向上や指導的地位の女性の割合が向上すれば、経済的な面でも男女対等に近づいていき、男性の子育てへの積極的な関与（最近では「イクメン」とも呼ばれる）や育児休暇を取得するなど女性への支援体制が強化されていくこととなる。そうすることは男性にとっても女性にとってもメリットになるという考え方である。

最後に、「身体障害者スポーツ」へ意識させられたことについて4名の内2人が挙げていた。このような反応があったことは、今後は「健常者スポーツ」と「障害者スポーツ」を分けて考えるべきではないし、お互いに理解が深まることは、スポーツ界全体の発展にも繋がっていく。そう考えると、今回のようなプログラムは分けて行うべきでないし、日本では徐々にしか進んでいない「バリアフリー化」に関しても進展する期待もある。遅きに失する感もあるが、2014年4月にはパラリンピックの管轄が厚生労働省から文部科学省へと移管され、オリンピックとの一元化が実現した。このようなパラリンピックへの意識の高まりこそが、東京2020オリ・パラ大会での「レガシー」へと繋がっていくものと考えられる。

### 第3節 調査3 Facebookの推移とメディア露出からの考察

まず、Facebookの推移を見ると現時点では「女性コーチアカデミー」を主催した「女性スポーツ研究センター」への、Facebookでの「共感ネットワーク」は、順調に拡大していったと考えられる。ネットワーク拡大の理論は集団の規模によって大きく変化するため、この状態がこの先もずっと続くとは考えられない。しかし、集団の成熟過程におけるひとつの段階として、Facebookを通じた取り組みはよい成果をもたらしていると思われる。

メディアの露出に関しては、現地で取材した新聞社の記事は9月の終了後から12月まで各紙でその切り口を変えて取り上げられている。今回の「女性コーチアカデミー」の開催は、事件や事故といった速報性があるものではないため、露出時期に関しても結果的に各紙に一斉に出て一過性のニュースソースで終わるより、内容的に継続して露出することによって、Facebookにも繋げて情報開示できたりすることも出来、それがテレビ媒体や、雑誌媒体にも波及するというメリットがあると考えられる。

また、今回のメディアに関しての取材については、開催地が「長野県・軽井沢」ということで、テレビ・新聞のマスメディアに関しては、地元長野のマスメディアにもアプローチしておくべきだ

ったのではないか。なぜなら、長野県は自治性が強いといわれており、地元新聞の「信濃毎日新聞」は地元長野でのシェアが50%以上と広く読まれていることやNHK長野放送局や長野では老舗の放送局といわれる信越放送（TBS系列）の存在がある。「教育県、長野」とも云われるだけに今回のような「女性コーチアカデミー」のような教育的なプログラムについては関心が高いのだと考えられる。他にも長野放送（フジテレビ系列）、テレビ信州（日本テレビ系列）、長野朝日放送（テレビ朝日系列）と東京のキー局の系列放送局が全て揃っていることなど地元だけでも取り上げられて放送される可能性があったことや、地元局が取材に行っていればその素材は保存されるであろうし、今後の放送への期待も大きくなることが考えられるからである。その点でもまず、地元紙、地元局へのアプローチを先に行い、その反応を見て関東のキー局への取材依頼を行うという順序があったようにも考える。

## 第6章 結論と今後の課題

### 第1節 本研究の結論

質問紙調査及びインタビュー調査に関しては、今回「女性コーチアカデミー」の参加者のみを対象とした研究とした。また、Facebookの分析に関しても「女性スポーツ研究センター」のFacebookページの分析と「女性コーチアカデミー」のメディアに関する露出に関する研究とした。

参加者への質問紙調査、インタビュー調査からは、女性コーチアカデミーへの高い満足度を得られたことが分かる。また参加者からは、日本において女性の指導者の絶対数が少ないことには不満はあるものの、優秀であれば男性女性は問わないという意見や、現代まで続く男性中心のスポーツ界はあと2～30年先まで変化がないだろうというような悲観的な意見も聞かれた。参加者自身は、自らがインフルエンサー（周りへの影響力の強い人）であるという自覚やプライドを示す発言もみられた。しかし、一方で日本において女性指導者が活躍するためには、既婚や未婚を問わず「年配の男性の理解」や「男性の協力」「パートナーや周囲の理解」といった男性の協力なしにはなしえないという実態も明らかになった。

本研究では、今回の参加者がSNSの利用や、情報拡散の意識が高かったという結果が出た。今回の参加に至った情報源と入手経路に関してもテレビや新聞などのマスメディアからの情報によって参加しようと思った参加者は皆無で、インターネット情報やクチコミあるいは手紙での案内などが情報源であり、情報入手経路であった。これはこのような「女性コーチアカデミー」の内容を情報拡散するにも、マスメディアで取り上げられることにこしたことはないのだろうが、一過性にならないためにも、プログラム内容や情報が伝わりやすいFacebookなどが重要になってくることを示唆する結果である。またそれを生かすためにも、写真だけでなく短い動画を利用した情報拡散なども工夫した専門セクションを設ける必要もある。そして、多くの人々の「共感」を得るために女性指導者を増やすための「戦略PR」でのコンテクトプランニングを構築していくことだ。最初から「日本のスポーツの女性指導者を増やそう」ということでなく、スポーツを実施する女性や女性指導者、それらに関心を持つ人々、潜在的なターゲットとのコミュニケーションを図るための、文脈づくりが必要となることが明らかとなった。例えば「女性に多いといわれる骨粗鬆症、実は女性アスリート特有の問題でもある、何故か。女性アスリートの生理的な課題への理解が不足しているからだ。8割を男性指導者が占めていることも大きな要因である。このような問題の解消のためにももっと女性指導者の割合を増やしていくべきだ」ということであったり「女性指導者が増えて社会で活躍することは、男性にとっても経済的にも負担が減ることであり、スポーツ界においても

男女双方にメリットが増えることなのだ」というようなコンテクストを作り多くの人々の共感を得ることが重要である。

## 第2節 今後の課題

本研究の今回の調査は「女性コーチアカデミー2015」の参加者のみであった。参加者競技レベルはかなり高く、女性スポーツに関しても意識の高い人たちの集まりであった。このような特殊な集団に限って調査を出来たことは大変有意義なものとなった。しかし、この女性コーチアカデミーのような「指導者養成プログラム」の重要性や必要性をもっと多くの人に広めるプロモーション活動を行うためには、今後は若年の女性アスリート（中学生、高校生、大学生）の女性指導者に対しての意識調査を行うこと、また男性指導者に対しての意識調査などを行ってその背景を明らかにしていくことが課題となる。

インタビュー調査では「男性の理解」を求めることをインタビュー対象者全員が挙げており、今後は男性に向けた「女性アスリートや女性指導者」の本質や必要性をより理解できるような教育システムとプログラム開発が求められるだろう。具体的には、女性アスリートを指導するにあたっては、女性のアドバイザーや相談できる女性メンターのような立場の人を組織内に必ず一人は置いておくような施策を明文化し、努力義務ではなくて必要義務として義務化させるようなことをすべきだと考える。

今回のアカデミーを主催した女性スポーツ研究センターの活動が「女性、女性」ということではなく男性の十分な理解と協力を得られるようなコンテクスト（文脈）の作成やアプローチが戦略的課題ともなると考えられる。

また、東京2020オリ・パラ大会開催に向けては、このような民間レベルでの活動も重要であるが、このような活動の裾野を広げていくためには、行政面での協力がより重要となってくるであろう。行政や日本政府もその重要性を認識しており、2015年10月にはスポーツ庁が発足した。「東京マラソン」などをきっかけにしたマラソンブームなど、かつて日本では高かった「スポーツをする」ことへのハードルは、生涯スポーツの普及といった、スポーツの大衆化によって徐々に下がってきて久しい。よりスポーツの裾野を広げるために何をすべきなのか。5年後の「東京2020オリ・パラ大会」が終わったら忘れ去られる様なスポーツ庁にならないようにスタートの今から施策を進めて女性のスポーツでの活躍が今後も大きく期待されることから、より女性スポーツや女性指導者の育成へも目を向けて支援策を提示していくべきだと考えられる。

## 引用参考文献

- 1) Adams, P. (2011). Grouped: How small groups of friends are the key to influence on the social web. New Riders.
- 2) アダム・スミス. (2003). 道徳感情論 (上・下). 水田洋訳, 岩波書店.
- 3) I&S BBDO NEWS. (2014). 第14回全国消費者価値観調査 (CoVaR) 結果 「SNS 利用率と意識」の実態調査. Retrieved June 18,2015 From [https://www.isbbdo.co.jp/config/cms\\_acv/news\\_pdf\\_ja\\_124.pdf](https://www.isbbdo.co.jp/config/cms_acv/news_pdf_ja_124.pdf)
- 4) 秋山剛. (2014). ソーシャルメディアを活用したマーケティング戦略.
- 5) 朝日新聞. (2015). NBA NFL 女性コーチ奮闘 2015年12月2日朝刊.
- 6) チアソル. (2015). 初めてでもよくわかる! Facebook Twitter LINE.オークラ出版.
- 7) 電通総研. (2015). 情報メディア白書2015 ダイヤモンド社.
- 8) dmenu. (2015). 「2012年ロンドン五輪特集 女子力強化がメダルの鍵」記事提供: 読売新聞 記事データベース「ヨミダス歴史館」. Retrieved June 1,2015 From [http://service.smt.docomo.ne.jp/portal/special/src/olympic2012\\_top.html](http://service.smt.docomo.ne.jp/portal/special/src/olympic2012_top.html)
- 9) Eagly, A., and Carli, L. (2007). Women and the labyrinth of leadership. Harvard Business Review, September, 62-71"
- 10) NPO 法人ジュース (JWS) HP 「女性スポーツ史」 「小笠原悦子 (2008) 第4回IOC 世界スポーツ会議報告書」. Retrieved November 25,2015 From <http://www.jws.or.jp/>
- 11) フィリップ・コトラー, ヘルマワン・カルタジャヤ. (2010). コトラーのマーケティング3.0 ソーシャル・メディア時代の新法則. 朝日新聞出版
- 12) 福田正治. (2009). 看護における共感と感情コミュニケーション. 富山大学看護学会誌, 第9巻1号, 2009.10.1-13
- 13) 福島宏器. (2012). 「他人への共感・自分への共感」. 関西大学社会学部・大学院社会学研究科. 教員コラム. Retrieved November 2,2015 From [http://www.kansai-u.ac.jp/Fc\\_soc/column\\_professor/detail.cgi?id=20120202094155](http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_soc/column_professor/detail.cgi?id=20120202094155)
- 14) GaiaX ソーシャルメディアラボ. (2014). 『2014年保存版』ソーシャルメディアまとめ 覧 & SNS の特徴・運用目的を徹底網羅!. Retrieved November 25,2015 From <http://gaiax-socialmedialab.jp/socialmedia/294>



- 15) GaiaX ソーシャルメディアラボ. (2015). 『2015年保存版』ソーシャルメディアのデータまとめ一覧。ユーザー数から年齢層まで、SNS 運用担当者は必見。 Retrieved November 25,2015 From  
<http://gaiax-socialmedialab.jp/socialmedia/368>
- 16) GaiaX ソーシャルメディアラボ. (2015). キーワードは「自己実現」！ソーシャルメディアを活用して『マーケティング4.0』を成功させた企業事例 . Retrieved December 8,2015 From  
<http://gaiax-socialmedialab.jp/socialmedia/407>
- 17) 芳賀竜也. (2015). 「SNS で五輪PR」 『毎日新聞』2015年5月19日朝刊
- 18) 濱岡豊. (2007). バズ・マーケティングの展開. AD STUDIES, vol, 20, 6.
- 19) 本田哲也. (2011). 新版 戦略 PR. KADOKAWA/アスキー・メディアワークス.
- 20) 本田哲也・池田紀行. (2012). ソーシャルインフルエンس 戦略PR×ソーシャルメディアの設計図. KADOKAWA/アスキー・メディアワークス.
- 21) 稲田佳代. (2015) 「女性登用でも世界一を／東京」 『毎日新聞』2015年7月5日東京都版.
- 22) 井上好. (2015). 女性スポーツセンター 海外レポート「米国の大学スポーツにおける女性コーチの現状」 . Retrieved November 25,2015 From  
[http://www.juntendo.ac.jp/athletes/portal/outside\\_report/outside3.html](http://www.juntendo.ac.jp/athletes/portal/outside_report/outside3.html)
- 23) 井上好. (2015).女性スポーツセンター 海外研究リポート 「タッカーセンター紹介 その1」 「タッカーセンター紹介 その2」 . Retrieved November 25,2015 From  
[http://www.juntendo.ac.jp/athletes/portal/outside\\_report/outside1.html](http://www.juntendo.ac.jp/athletes/portal/outside_report/outside1.html)
- 24) 井徳正吾. (2014). 消費行動仮説 「AISECAS (アイシーキャス)」 モデル～ スマートフォン時代の新しい消費行動モデルとして～. 情報研究 (Information and Communication Studies), 50(1), 1-16.
- 25) 伊藤真紀. (2010). 女性スポーツについて 『Stay Hungry. Stay Foolish』 . Retrieved November 25,2015 From  
<http://makimaki11.exblog.jp/13508108>
- 26) 女性スポーツ研究センター. (2012). 「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2012」開催報告第2部『スポーツ界における女性のリーダーシップを考える～必要なことは何か～』～カナダでの取り組みをふまえ、日本での応用、実施の可能性について～. Retrieved November 25,2015 From  
<http://www.juntendo.ac.jp/athletes/news/20121124-02.html>

- 27) 女性スポーツ研究センター. (2015). HP「女性とスポーツの歴史」「女性スポーツの国際会議」「女性アスリートの活躍」「女性スポーツデータリサーチ」「女性コーチアカデミー実施報告」. Retrieved November 25,2015 From  
<http://www.juntendo.ac.jp/athletes/news/>
- 28) 順天堂マルチサポート事業. (2013). 女性アスリート戦略的強化支援方策レポート エッセンス版. 12-13.
- 29) 順天堂マルチサポート事業. (2012). 女性アスリートの戦略的サポート事業2012.. Retrieved November 25.2015 From  
<http://www.juntendo.ac.jp/athletes/workdetail.html>
- 30) 順天堂マルチサポート事業. (2012). 『Taking the Lead カナダ発女性コーチの戦略と解決策』
- 31) 順天堂ホームページ.(2015).「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2015」開催報告.  
Retrieved November 25,2015 From  
<http://www.juntendo.ac.jp/olympic/news/20150223-04.html>
- 32) 川崎惣一. (2009). 道徳的行動の主たる要因としての共感について. 北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編. 60(1), 15-27.
- 33) 経済同友会. (2012). 「意志決定ボード」のダイバーシティに向けた経営者の行動宣言-競争力としての女性管理職の登用活用. Retrieved March 15,2015 From  
<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2012/pdf/121016a.pdf>
- 34) 來田享子. (2001). 目で見ると女性スポーツ白書「コラム」, 大修館書店. P37
- 35) 來田享子・木村古次. (2000). オリンピック大会への女性の参加をめぐる 1928-1932 年の IOC と IAAF の見解 1930 年第 9 回オリンピック会議議事録と J. Edstrom の書簡を中心に. 日本体育学会大会号, (51), 137.
- 36) Kilty, K. (2006) Women in coaching. *The Sport Psychologist*, 20(2), 222-234
- 37) 北山大蔵編. (2012).ダブルファネルマーケティング. トランスコスモス・アナリティクス(株) 著. リックテレコム
- 38) 北中英明・木戸茂・鈴木暁・中村仁也. (2010). 生活者の対面コミュニケーションにより生成されるソーシャル・インフルエンストについての一考察. 経営情報学会 全国研究発表大会要旨集, 2010(0), 69-69.
- 39) 毎日新聞. (2012). 「ロンドン五輪開幕 史上初全競技に女子選手」2012年7月28日夕刊.
- 40) 毎日新聞. (2012). 「ロンドン五輪閉幕 ツイッター威力発揮」2012年8月13日夕刊.

- 41) 毎日新聞. (2015). 「女性登用 30%政府断念 20 年度目標分野別数値に」 2015 年 12 月 4 日朝刊.
- 42) 松山尚道・菅井京子・新宅幸憲・佐藤馨・金田安正・金森雅夫・新井博. (2013). 地域スポーツコースの 10 年. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要. 第 10 号, 20-21.
- 43) 文部科学省. (2012). スポーツ基本計画. Retrieved November 25,2015 From <http://www.mext.go.jp/component/amenu/sports/detail/jcsFiles/aficldfile/2012/04/02/131935931.pdf>,
- 44) Mullins, A. (2008). The UK coaching system in failing women coaches :A commentary. International Journal of Sports Science and Coaching, 3 (4) , 465-467.
- 45) 村松洋兵. (2015). 「LINE、街へ飛び出せ」 『日本経済新聞』 2015 年 4 月 1 日朝刊
- 46) 内閣府. (2007). 「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス) 憲章」. Retrieved November 25,2015 From <http://www.cao.go.jp/wlb/government/index.html>
- 47) 内閣府. (2010). 第 3 次男女共同参画基本計画.
- 48) 仲島陽一. (2001). ヒュームとスミスにおける< 共感 > の問題. 国際地域学研究= Journal of regional development studies, (4), 151-160.
- 49) 仲島陽一. (2006). 共感の思想史. 創風社, 東京.
- 50) 那須幸雄. (2009). AMA によるマーケティングの新定義 (2007 年) についての一考察. 文教大学国際学部紀要, 19(2), 93-99.
- 51) 日本マーケティング協会. (2012). マーケティング Wiki~マーケティング用語集. Retrieved August 10,2015 From <http://jma2-jp.org/wiki/index.php>
- 52) 日本オリンピック委員会 (JOC) HP. Retrieved December 8,2015 From <http://www.joc.or.jp/games/Olympic/london/japan/>
- 53) 日本オリンピック委員会 女性スポーツ委員会. (2004). スポーツ団体の女性スポーツへの取り組みに関するアンケート調査. 1-30
- 54) 日本オリンピック委員会 女性スポーツ専門部会. (2012). 「ロンドンオリンピック出場女性アスリートに対する調査報告書」

- 55) 日本スポーツ振興センター.(2014). 「第6回IWG 世界女性スポーツ会議参加報告」,  
Retrieved December 8,2015 From  
<http://www.jpnsport.go.jp/corp/gyoumu/tabid/124/Default.aspx>
- 56) 日経BP コンサルティング. (2014). 携帯電話・スマートフォン“個人利用”実態調査 2014
- 57) Norman, L. (2008) The UK coaching system is failing women coaches. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 3(4), 447-464
- 58) 能瀬さやか・上肥美智子・難波聡. (2014). 女性トップアスリートの低用量ピル使用率とこれからの課題. *日本臨床スポーツ医学会誌*, 22(1), 122-127.
- 59) 小笠原悦子. (2001). 日で見える女性スポーツ白書「コラム」, 大修館書店. P41
- 60) 小川節子. (2015). 「女性スポーツ選手の健康を守る、久保田俊郎・山口香・加藤聖子対談(特集記事)」『毎日新聞』2015年3月5日朝刊.
- 61) Qoly Football Web Magazine (2015). 英国の新スポーツ大臣は現役サッカー指導者.  
Retrieved November 25,2015 From  
<http://qoly.jp/2015/05/13/uk-new-sports-minister-tracey-crouch>
- 62) 笹川スポーツ財団. (2013). 「平成25年度文部科学省委託調査 スポーツ政策調査研究(海外のスポーツ基本計画に関する調査研究)」
- 63) 笹川スポーツ財団. (2015). 『諸外国から学ぶ諸外国のスポーツ基本法：カナダのスポーツ政策』 . Retrieved November 25,2015 From  
[http://www.ssf.or.jp/archive/sfen/sports/sports\\_vol7-1.html](http://www.ssf.or.jp/archive/sfen/sports/sports_vol7-1.html)
- 64) 斉藤徹. (2012). mixi, Twitter, Facebook, Google+, LinkedIn 2月最新ニールセン調査.  
Retrieved December 7,2015 From  
[http://media.looops.net/saito/2012/03/22/nielsen\\_20120/](http://media.looops.net/saito/2012/03/22/nielsen_20120/)
- 65) 佐藤尚之. (2008). 明日の広告 変化した消費者とコミュニケーションする方法 (Vol. 1). KADOKAWA/アスキー・メディアワークス.
- 66) 佐藤尚之. (2011). 明日のコミュニケーション「関与する生活者」に愛される方法(Vol. 1). KADOKAWA/アスキー・メディアワークス.
- 67) 佐藤馨. (2013). スポーツ組織における女性の意志決定者に関する調査報告. びわこ成蹊スポーツ大学, THINK SPORT WEB. Retrieved December 27,2015 From  
<http://hsscj.jp/thinksport/vol14/announcement02.html>

- 68) 佐藤由紀子. (2015). 「Instagram, MAU が3 億人突破でTwitter 超え」『ITmedia ニュース』. Retrieved June 18,2015 From  
<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1412/11/news049.html>
- 69) 泉水清志. (2014). ソーシャルメディアの共感が購買行動に及ぼす影響—ソーシャルメディア利用度と口コミ経験からの検討—.
- 70) 社団法人 日本産婦人科学会. (2014). 「女性アスリートのヘルスケア小委員会 久保田敏郎委員長」 日産婦誌 66 巻 6 号, 1482.
- 71) 篠健一郎. (2015). 「SNS 写真・動画人気」『朝日新聞』2015 年 4 月 1 日朝刊.
- 72) 総務省. (2014). 平成 26 年版情報通信白書 ICT 白書. 全国官報販売協同組合
- 73) 総務省. (2015). 平成 27 年版 情報通信白書 HP . Retrieved December 13,2015 From  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/index.html>
- 74) 総務省 情報通信政策研究所. (2014). 「平成 26 年版 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」. Retrieved December 13,2015 From  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc253210.html>
- 75) 総務省 情報通信政策研究所. (2015). 「平成 27 年版 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」. Retrieved December 13,2015 From  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/na000000.html>
- 76) 田原和宏. (2015). 「順天堂大:女性コーチアカデミー開設 指導者の資質向上へ初の試み」『毎日新聞』2015 年 2 月 20 日夕刊.
- 77) 高広伯彦. (2012). 次世代コミュニケーションプランニング. ソフトバンククリエイティブ.
- 78) 田中ウルヴェ京. (2004). 「キャリアトラディション」スポーツメディスン. 2004 年 8 月号
- 79) 東京新聞. (2015). 「女性管理職 52%『なって良かった』」2015 年 12 月 7 日朝刊.
- 80) 上野啓子. (2004). マーケティング・インタビュー: 問題解決のヒントを「聞き出す」技術. 東洋経済新報社
- 81) 梅田 聡, 他 (編) (2014). 共感 (岩波講座 コミュニケーションの認知科学 第 2 巻). 岩波書店.
- 82) ワイズワーク.(2015). 「AIDOMA」から「AISAS」または「SIPS」への変化. Retrieved December 29,2015 From  
<http://yswork.co.jp/newwa/1-3>

- 83) 鷺尾紀吉. (2009). マーケティング理論の発展とマーケティング・マネジメント論の展開. 中央学院大学商経論叢, 24(1), 3-12.

## A practical research about promotional activities of Women Coaches Academy

Kazuyuki MIYAMOTO

(Juntendo University)

### Abstract

The ratio of sports executives in Japan is 8 to 2, with women executives being overwhelmingly less. Given the fact that in the Games of the XXX Olympiad (2012, London; hereafter referred to as the London 2012 Summer Olympics) the number of female athletes exceeded that of males, it is a pressing issue to increase the number of women leaders in Japanese sport. However, as the JOC report showed, although about 40% of female athletes who participated in the London 2012 Summer Olympics have expressed desire to become executives, the social environment does not facilitate an increase of female leaders, since marriage and childbirth, lack of understanding from family and friends often become obstacles.

In September 2015, the Japanese Center for Research on Women in Sport (JCRWS) of Juntendo University implemented a comprehensive training program for female leaders called "Women Coaches Academy" in Karuizawa, Nagano prefecture. In order to further develop this program for women leaders, the first of its kind in Japan, and connect it to the increase in the number of women executives in sport, it is necessary to deepen public's awareness and understanding of these activities. For that purpose it is important to look at promotional activities so far, as well as to examine current issues and policies to be implemented in the future.

The purpose of this study is twofold. First, it aims to examine the effectiveness of SNS and media exposure utilized to promote the JCRWS-organized Women Coaches Academy 2015 and to find out how the participants spread (or are willing to spread) information, how they obtain information, and what contents and PR strategies will be needed in the future, Second, our objective is to verify what is necessary for Academy participants to continue their activities in leadership positions, as well as to find out the extend of understanding shown for activities organized by JCRWS.

Based on the above, we propose a policy recommendation and promotion strategies that

will help to raise awareness and spread information about Women Sports Academy's activities, and in doing so to achieve an increase of women leaders.

In this study the following research methods were utilized. First, we examined the PR strategies of Women Coaches Academy 2015, drawing on their Facebook page and media appearances. Second, we conducted a questionnaire to 32 participants of Women Coaches Academy. Finally, we conducted semi-structured interviews with 4 participants (each of different age groups) of Women Coaches Academy.

The study demonstrated that close to 80% of participants used Facebook. This is well above the Ministry of Internal Affairs and Communications 2015 survey result indicating that Facebook usage was 35 % implying that Facebook use is indeed effective. The analysis of browsing habits also demonstrated that it is necessary to make improvements in the content, such as using videos. However, given that word of mouth communication have more incentive in terms of information transmission, it is also necessary to consider a context that can correspond to personal communication. Furthermore, as some of the participants' remarks indicated that they were aware and proud to be "those who influence others (people having influence on their surroundings)", it is necessary to promote and publicize a program where one can take pride in participating in the program. At the same time, since participants tend to seek understanding and cooperation of men regardless of their marital status, it is necessary to develop educational programs for men as well as to adopt PR strategies that will demonstrate that increasing the number of female leaders would be beneficial for male executives as well. The above-mentioned promotion activities will help to achieve more understanding for female leadership in sports.

In conclusion, in order to increase the number of women executives it is important to raise awareness and understanding of this issue, as well as to propagate a context in which the benefits not only for women athletes but also for male executives (e.g. the increase of female leaders would reduce men's workload) are understood.



## 謝 辞

本修士論文は、筆者が順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 マネジメント専攻博士前期課程在学中に小笠原研究室並びに女性スポーツ研究センターが主催した「女性コーチアカデミーのプロモーション活動における実践研究」をまとめたものです。本研究において終始ご指導ご鞭撻を頂きました本学 小笠原悦子教授に心より感謝致します。また、本論文をご精読頂き有用なコメントを頂きました本学 黒須 充教授、工藤康宏先任准教授に深謝致します。

本研究の執筆にあたっては、本学 北村 薫特任教授、廣津信義教授、長登 健教授、鯉川なつえ先任准教授、小笠原研究室の伊藤真紀助教など多くの皆様にも適切なご助言を頂きありがとうございました。そして博士課程後期の河野洋先輩や小笠原研究室の片山洋平先輩にはアンケート調査の作成や分析に関してもご助言いただきまして本当に感謝しております。さらに、本研究における質問紙調査及びインタビュー調査へのご協力と基礎データのご提供にご協力頂きました、女性スポーツ研究センターの桜間裕子、北村あずさの各研究員の皆様にも深く御礼申し上げます。データ分析に関しましても、日本能率協会総合研究所の松川勇樹室長にも大変お世話になりました、ありがとうございました。

また、私自身社会人の研究生でありましたので、何かと教務課の三上喬之さんにも大変お世話になり、いつも電話で快く対応して頂きありがとうございました。さらに質問紙調査やインタビュー調査にご協力いただきました「女性コーチアカデミー」参加者の皆様にも心より御礼申し上げます。

私自身、平日は仕事もあり、土日しかご指導いただけないということで、小笠原研究室の学部生、院生の皆様、特に、同期生の渡邊夏美さんと村井裕貴くんには非常勤講師としての「メディア経営論」講義での協力も含め多大なご協力と励ましが無ければテレビ局社員というマスメディアの管理職と52歳の大学院生の一足のわらじは到底続きませんでした。本当にありがとうございました。

最後に、2年間の順天堂での大学院生活を暖かく見守ってくれた妻・美樹子と息子・恵太、忙しい中で原稿チェックをしてくれた兄・博規、そして理解して頂いた会社の同僚にも深く感謝します。

この2年間、順天堂大学を通じ多くの方々と出会い、たくさんのごことを学び本当にお世話になりました。このご縁とご恩を忘れずに大切にして、今後の人生に生かしたいと思えます。また、順天堂大学に少しでもご恩返しができるように頑張ります。皆様、本当に心より感謝申し上げます。

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科  
博士前期課程 スポーツマネジメント研究室

宮本 和幸

添付資料A

質問紙調査用紙（アンケート用紙）

## 「女性コーチアカデミー2015」参加者向けアンケート

2015. 9. 17 実施

女性スポーツ研究センター事務局

順天堂大学スポーツマネジメント研究室 宮本和幸

このアンケート調査は、「女性コーチアカデミー」の今後の活動と発展を目的とし、アカデミー参加者を対象に実施するものです。アンケートの結果は、女性コーチアカデミーの活動に関する資料として利用されます。また、回答は日本の女性スポーツに関する学術研究データとして利用されます。

本調査において、参加者はアンケートへの回答をもって、調査の趣旨に同意したものとみなします。回答データは、グループとして統計的に処理され回答者個人が特定されることはありません。このアンケートの中で回答したくない質問は飛ばしても構いません。このアンケートにかかる時間はおよそ15分です。

ご協力くださいますようお願いいたします。

### Part I.

あなたご自身について以下の項目にお答えください。

A. 年齢 ( ) 歳

B. 所属

1. 企業コーチ
2. 大学コーチ
3. その他 ( )

C. 「女性コーチアカデミー2015」をどのようにしてお知りになりましたか？

当てはまる番号に○を付けてください。複数回答可です。

1. 「女性サッカーワールドカップ カタール2015」(2月14日開催)に参加して
2. 新聞での報道で
3. テレビでの報道で
4. 所属している大学・会社などから紹介されて
5. 友人・知人に教えられて
6. その他 ( )

### Part II

Q1.あなたが「女性コーチアカデミー」に参加した理由を以下の質問にお答えください。

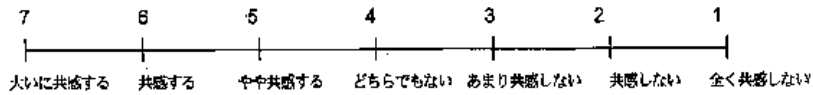
A. 今回この「女性コーチアカデミー」に参加を決められた「動機」は何かをお教えください。

複数回答可です。

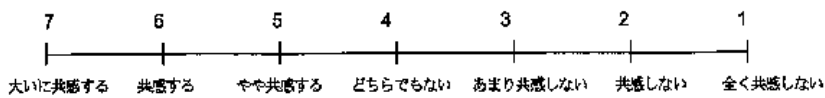
1. 自分自身のスキルアップのために
2. 友人・知人に勧められたから
3. その他 ( )

B. 女性コーチアカデミーは、日本の女性スポーツ関係者に「共感」して貰えるような活動を目指しています。以下の女性コーチアカデミーの活動や考えについて、「大いに共感する」(7)～「どちらでもない」(4)～「全く共感しない」(1)から、最も当てはまると思うものについて○を付けてください。

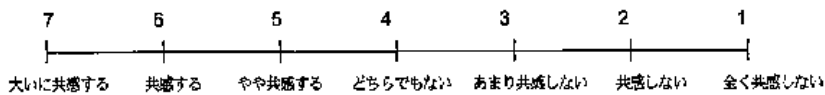
① 日本のスポーツにおける女性の地位向上を目指す(男女間の差をなくす)



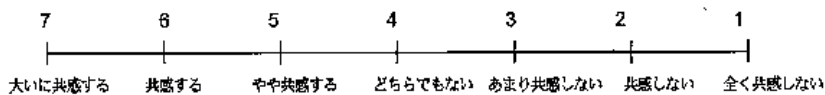
② 女性コーチが女性アスリートを指導できる環境を作る。(女性がコーチとなれる環境を作る)



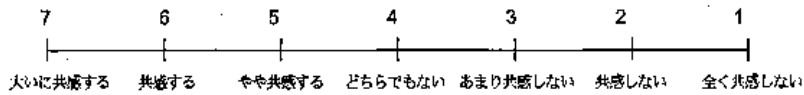
③ 女性アスリートには、女性特有の問題を理解した指導者が必要である。



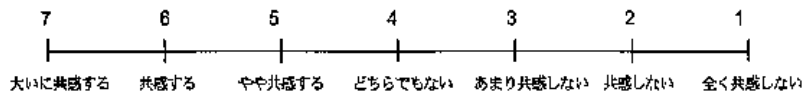
④ 女性のスポーツ参加を阻害する社会的要因を解消していく。



⑤ 女性の指導者を養成するプログラムやセミナーを広く開催する。



⑥ 実際に活躍している女性スポーツ関係者の経験や知識を広く共有する。



C. 女性コーチアカデミーにあなたが期待していることを自由に書いてください。

Q2. 女性コーチアカデミーは、活動の情報発信にSNS (Facebook) を利用しています。今後の情報発信がより活発になるようあなたのSNSの利用状況について以下の質問にお答えください。

A. あなたはSNSを利用していますか。

1. 毎日利用している
2. たまに利用している
3. あまり利用していない
4. 利用していない

なお、1~3に○を付けた方は、以下のB,C,D,Eの全てにご回答ください。

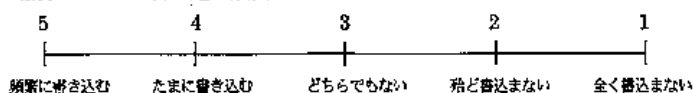
4に○を付けた方は、DとEのみにご回答ください。

B. 以下の項目から、あなたが利用しているSNSを選んでください。

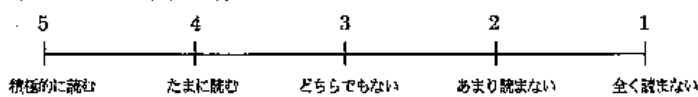
1. Facebook 2. Twitter 3. Instagram 4. その他 ( )

C. あなたの普段のSNSの利用方法について、当てはまるものに○を付けてください。

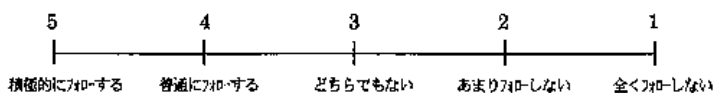
① 自分がSNSに書き込む頻度について



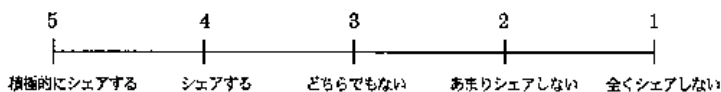
② 他人のSNSの記述を読むことについて



③ 他人の記事をフォローすることについて (Facebookの「いいね!」を押すことなど)



④ 他人の記事をシェアすることについて



D. 「女性コーチアカデミー」について、参加するまでに何らかの形で情報発信をしましたか。以下の項目から、あてはまるものに○を付けてください。

1. SNSのサイトで
2. SNS以外のウェブサービスで
3. 大学の授業などで
4. セミナーや講演会などで
5. 指導しているスポーツ団体の活動中で
6. 友人、同僚、知人などに話した
7. その他 ( )

E. 「女性コーチアカデミー」のカリキュラムを終了された今、何らかの形でこの内容などを情報発信をしたいと思いませんか。以下の項目から、あてはまるものに○を付けてください。

1. SNS のサイトで
2. SNS 以外のウェブサービスで
3. 大学の授業などで
4. セミナーや講演会などで
5. 指導しているスポーツ団体の活動中に
6. 友人、同僚、知人などに対して
7. その他 ( )

Q3. 最後に、今回参加された「女性コーチアカデミー」についての参加される前の「期待度」とカリキュラムを終了された今の「満足度」についてお答えください。  
 なお、各質問は「期待度」と「満足度」の両方にお答え下さい。

No.	質問項目	期待度							満足度						
		とても期待している	期待している	まあ期待している	どちらでもない	あまり期待していない	期待しない	全く期待していない	とても満足	満足	まあ満足	どちらでもない	少し不満	不満	とても不満
1	オープニング(自己紹介含む)	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
2	プロフェッショナルとしてのコーチング	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
3	女性アスリートのコンディショニング「女性アスリートの三主眼」	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
4	女性アスリートのコンディショニングⅡ「スポーツ栄養」	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
5	スペシャルトーク@ラウンジ	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
6	コーチのためのキャリアプランニング	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
7	DNSCプログラム	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
8	メンタル&コピーングスキル	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
9	コミュニケーションスキル	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
10	ワークライフバランス	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
11	チームビルディング	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
12	リーダーシップ	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
13	女性スポーツの歴史	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
14	スポーツにおけるダイバーシティ	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1

アンケートは以上になります。



## 添付資料B

・インタビュー調査における質問項目

・女性コーチアカデミー参加者4名に対するインタビュー調査の結果(全文)

## インタビュー調査による質問項目

### 1. スポーツキャリア

- 1) ご自身のスポーツキャリアに関してですが、これまで何歳からどのようなスポーツ経験をされていますか？
- 2) そのスポーツ経験から得られたものはなんですか？
- 3) そのスポーツ経験の中で一番記憶に残っている出来事は何でしょうか？
- 4) スポーツ現役時代を振り返って満足されていますか？  
(満足、という答えなら) それは、どういうところでしょうか？  
(不満足、という答えなら) それは、なぜでしょうか？

### 2. 指導者

- 5) これまでご自身が指導を受けたことのあるのは男性指導者・女性指導者ではどちらが多いでしょうか？またその割合はどれくらいですか？
- 6) 女性又は男性指導者のそれぞれの特徴あるいはそれぞれの良さ、または良くない点があるとすればどのようなところでしょうか？
- 7) 日本においては、女性の指導者は絶対的に少ないわけですが、その要因はどのようなものにあるとお考えですか？
- 8) そんな中、ご自身は「女性スポーツ指導者」である（又は目指している）わけですが、現在どのようなご苦勞がありますか？

### 3. 女性コーチアカデミー

- 9) 女性コーチアカデミーに参加して2ヶ月以上経ちましたが、参加されて何が良かったと思いますか？印象に残っているプログラムやその内容について教えてください。
- 10) 2泊3日の合宿期間中、プログラムの合間などに他の参加者とどのような話をされましたか？
- 12) 他の参加者に対しては、全体的にどのような印象を受けましたか？
- 12) 今回、プログラムを受講されて何か指導者としての考え方に変化が生じたと思われませんか？
- 13) 受講されてご自身で何か変化がありましたか？
- 14) あなたが女性コーチアカデミーに参加したことは何人ぐらいが知っていると思いませんか？
- 15) それは、どのような手段で伝えましたか？



#### 4. SNSの利用状況

- 16) あなた自身、SNSに関してどのような考えを持っていますか？
- 17) SNSの良い点は何だと思えますか？また悪い点は何だと思えますか？
- 18) SNSを利用されていますか？（利用されていれば）他に何を利用されていますか？
- 19) 利用しているのは、パソコンですか。スマートフォンですか？どちらでもですか？
- 20) 一日にSNSに接触している時間（LINEなども含め）はどれくらいだと思えますか？  
また、Facebook以外のSNSの何にどれくらいの時間を費やしていますか？
- 21) SNSを利用されるにあたって、特に意識したり注意されたりしていることはありますか？

#### 5. Facebookの利用状況

- 22) Facebookを一日にどれくらい活用されていますか？
- 23) 使っている方は、何人ぐらいの「Facebook上の友達」が登録されていますか？  
また、Facebookの良い点と悪い点は何だと思えますか？
- 24) 使っていない（あまり使っていない）という場合はなぜでしょうか？では今回の「女性スポーツアカデミー2015」が開催されたことなどFacebook上にアップされたのはご存知でしたか？

#### 6. プロモーション活動

- 25) このような活動を広くお知らせするあるいは普及するためのプロモーション活動には、今後どのようなことが大切だと思えますか？
- 26) マーケティング用語で、周りの方々に強い影響を与える人のことを「インフルエンサー」といいます。ご自身もインフルエンサーの一人であるわけですが、そのように言われることをどう思われますか？
- 27) これまでの経験の中で、ご自身が強い影響を受けた「インフルエンサー」がいらっしゃればどのようなことに影響を受けたのか、を教えてくださいませんか？

#### 7. 今後の課題

- 28) では、具体的に女性指導者をもっと増やすには「女性コーチアカデミー」のような活動のほか、にどのようなことをやっていく必要があると思えますか？
- 29) 日本で、女性コーチの必要性をもっと理解し、知らしめるために必要なことはなんですか？
- 30) 女性指導者を増やすために、今後どのような方たちの理解が必要だと思えますか？

# 1. スポーツキャリア

資料1. ご自身のスポーツキャリアに関してですが、これまで何歳からどのようなスポーツ経験をされていますか？

20歳代	3歳から兄の影響でサッカーを始めました。1年半前の26歳のときに引退しました。小さい怪我は多かったですが、治りも早いので23年間の現役生活を何とかやってきました。
30歳代	小学校3年生から高校3年生まではバレーボールをやっていました。結構本格的にやっていたので、それこそ「春高バレー」を目指してというような、東京都で最低でもベスト8には入ろうという監督の下厳しく練習をしていました。その後、元々実はサッカーをやりたいというのが心の奥底にありまして、まだ時代が女子サッカーがここまで普及してなかったんで、ちょうど高校受験をする時に、バレー部の顧問の先生に「サッカーをやりたいんです」という話をしたら「お前はバレーボールをやれ」という感じで、何と云うんですかね、そのときまたま（大学の）何校かから声を掛けていただいて、声掛けていただいているにも関わらずなんでまたサッカーを、という感じになってしまって、本当に当時東京でどこが強いとかインターネットとか普及していなかったんで、情報が掴めなかったんですね。じゃあ、バレーボールをするべきかなあと思ったんですけど、でもサッカーをやりたいという気持ちがあったので、大学をどこにするかを結構色々探して、サッカーが一番ではなかったのですがその後（一般入試を受けて）運よく福岡大学に入ることが出来ましてそこで（自分から入部しますということ）でサッカーと出会って4年間やったということですね。その後すぐ大学院に進んだので指導者に変更して2年間コーチをして、その後助手で大学にまた残ったので（指導を続けました）。それから、ちょうど7年前に福岡で結婚をして東京に引っ越して来まして、その時ちょうどユニバーシアードのスタッフがいないからということでも声を掛けていただいてユニバーシアードに3ヶ月ぐらい携わって、それ以降は全く6年間ぐらいは全く指導をしていない状態ですね。
40歳代	4歳から34歳まで、硬式テニスをやっていました。
50歳代	中学1年生の13歳から「体操競技」一筋できました。28歳まで現役生活でした。

資料2. そのスポーツ経験から得られたものはなんですか？

20歳代	たくさんありますが、「良い仲間に出会えた」というのと、サッカーがあったので「どうやって目標設定したらいいのか」とか、その目標に向かってどういう行程を経て自分は目指していくべきなのかとか、計画したのがうまくいかないときにどう変えなければいけないとか（を意識していたと思います）。わたしの場合ですとサッカーが常に自分の目標とか夢であったので、それに向ってというのが常にあったので、そういうトレーニングというのはおそらくサッカーを通して出来ていたことなのかなあと思えますし、またそれが今セカンドキャリアに転向したときも生きているなあ、という風には感じています。元々、小学校のときに教えてくださったコーチが「サッカーでは一生食べていけないんだから、次のこともきちんと考えながらやりなさい」というような方だったので、（日テレ）バレーザの下部組織に合格したんですけど、それも家族ごと引っ越さなければいけないような距離感だったんですけど、「1、2年で首切られるようなのにそこまでする必要あるのか？」とか、そういうことをよくおっしゃって下さっていた方が、わたしの最初のコーチだったので、そのころからサッカーでは一生食べてはいけない、じゃあどうするか？というのはずーと頭にありました。その後出会う監督や筑波大学の女子サッカーを創部された方も、わたしのメンターな方なんですけれども「サッカーばかりやっていないできちんと勉強しろ」とか、そういうことを言って下さっていたので、わたしは割りと早い時期から、サッカーで目指すことと、そしてサッカー引退後に自分がやりたいことと同輪で常に考える癖はついてきたのかなあ、と思います。
30歳代	やはり自分からやりたいとか、自分から練習したいとか何かこう自分の意思で動かないと何も身につかないのかなという気はします。やはり高校生の時だと気づかない部分はありますね。特に高校生の時にバレーボールという種目だと、どうしてもこのメニューをやれ、という考えが大きかったので、でも不思議な体験もしたりしましたね。監督が「これだけ厳しい練習をしているんだから、試合のコートに立ったら怖いものは何も無い」みたいな感じでずっと言われていて、実際に負けていく（これに）勝たないとベスト8に上がれないという時で、まだ（サーブ権のある）15点マッチの時だったので、ちょうど10対2とか3で負けていた時があってその時にふと「私たちあんな厳しい練習をしたから負ける気がしない」というような感覚が湧き起こったというか、それで実際に逆転して勝つというそういう変な成功体験みたいなものがあって、やはりここまでやってはじめて始めて試合に向うというそういう経験も、なんかスポーツに限らず大事なのかな、というのは思いました。でも、それをサッカーで指導者として反映させようとするのが難しく、じゃあもうめっちゃくちゃ走ればいいのかとか、ボールが見えないくらい暗くなってもやればいいのかとか、ということもそれ何だか違ったんですね。サッカーに移行した時は、そういうのは通用しなくてどちらかというと、それはまあ非科学的なトレーニングという感覚があったので、やはりバレーボールの時に培ったものを、そのまま指導者として（選手に）与えるというのは、競技性の違いもあるのかもしれないですけど、やはり自分があれやこれやと強く言っても選手は付いて来ないというか、最終的に自分からやろうという気持ちにならないと全く駄目なんだというのが、大学生は特にそう思いますね。高校生だったらまだ何とか引っ張っていきけるのかもしれないですけど、大学生は自分たちで考えてやろうという、その意思を持っていくことのほうが大事なんだというのが分りますね。
40歳代	一言では語れないですね。テニスは色々なものが求められるので、ツアーで世界中を廻ることで他文化の中での対応力とか柔軟性と、アスリートとして成功するには人間としての総合力というのが求められると思うので、コーチングという選手としての技術だけを学べば結果が出るかというそういうことはなくて、人間力というのをとても感じながら世界を廻っていました。
50歳代	夢を追いかけてそれを達成することの喜びとか、自分の人間形成にスポーツは役に立ったと思っています。それが、今も指導に関わるきっかけとか、それが根本にあるからだと思います。私の時代は一から十まで指導者に教わったというのではないので、自分でこうやりたいあやりたいと描いているものとそれを形として評価されるものなので、ある程度技の追求と云いますかこうなりたいというもの、例えばオリンピック選手であったり、活躍している人だったり、体操を始めたころは身近にいる全日本のトップレベルとか、あるいは自分のライバルになるであろうという人たちから得るものでした。ですから全くオリジナリティというのは動いている瞬間なのでその都度パッとひらめいては消えということがありますが、それを記録とか形に文字とかにも残してこなかったんで何という風に特定は出来ません。しかし、瞬間的に演技の中でバランスを取り直すとか、以前は規定演技というのがあってそれは絶対に変えることは出来ませんが、自由演技は多少その時によって振り付けを変えてしまったり、その日の気分で変えるというのはよくやっていました。技については自分のオリジナルなものをどうしようかという意味ではよくやっていたんですが、それを自分で発表するよりは、世界のトップ選手がやったものを次の日に体育館に行って自分もやりたいととんでもないことを言っていた記憶はあります。

資料3. そのスポーツ経験の中で一番記憶に残っている出来事は何でしょうか？

20歳代	選手としての一番大きなターニングポイントは、大学4年生の時に部長（主将）をやらせてもらってその時の経験の1年間を通して、スポーツの中で自分が人としてどうやって生きていったらいいか、というのが定まった時期ではあるのですが、その経験というのはとても大きかったなあ、と思います。あとは、プロでサッカーが出来た4ヶ月間は大きかったなあ、と思いますね。
30歳代	サッカーをやって、やはり中学・高校とやっている人からすると、（競技）レベルが全然違うので、そういった4年間培っただけでも、4年間やってもやはり大学から始めたというのは「初心者」というような感覚が強いですけど、それでその指導者に変った時に、やはり自分よりも確実に技術がある選手が学生にいて、自分はそこまで技術は無いんですけど、でも当時の学生に言われたんですけど、自分は大学院生になってチームのために何か出来ることがあれば残ろうとか出来ることをやろうかなと、まあ技術的なことはアドバイス出来ることもあるかもしれないけれども、まあ私より上手い選手がたくさんいるので、サッカーの方はみんなの方がもちろん知っているという感覚だったんですけど、まあ精神的な柱にはならなくとも「チームに残ってください」というふうに学生に凄く言われた時に「ああ、やってよかったなあ」と、私もチームに残りたいとは思っていたんですけど、学生から自分が言う前に先輩から「絶対チームに残ってください」という形で「大学院の勉強も大変だと思いますけれども」と言ってくれた時は「やっぱりサッカーをやっている良かったなあ」という聲がりますかね、そういうのが凄く大きかったですね。
40歳代	何でしょうね。一言では表せないくらい沢山あるので…。あげるとすれば、自分がスランプを乗り越えた経験ですかね。自分自身はもちろんですけども、それだけじゃなくて周りのヘルプが必要というのと、自分の意識改革がとても必要だったので、それまでの自分の成績はそれなりにありましたけれども、そこを出直して初心に戻ってしっかりと自分と向き合うこと、人間力を磨いていくことがやはり一番の近道だったので、それをやり直したきっかけがスランプだったと思います。
50歳代	失敗の経験の方が多いと思いますが、それは準備段階での失敗とそれから怪我を未然に防げなかったという、それが今指導の立場の時に自分の失敗の経験から「こういうことが起こるであろう」という予測がかなり出来るので、それを起こさないための事を母親じゃないけど、やはり先回りして「こうだ、ああだ」と言っていることが多いです。例えばマットの整え方ひとつにしても、マットの隙間が空いていたり、本当に細かいことですけど「いいや」って思うのか、そこをちゃんと整えておいて大胆にやるのかですね。私の大学時代コーチのひとりに教わったことは、私もひらめきで感覚的な選手だったので、最低ラインここまで出来るというコンスタントに出来るという考え方や練習の仕方というのは、大学時代に教わったことでそれが無ければ、昨日と今日では気分が違って我儘いっぱいにやっていたと思うんですね。人によって他人との協調性とか、それと同時に私の恩師は個性を大事にしてくれて、「こうしてはいけない、ああしてはいけない。」ということあまり言われたことがなくて毎日自由にさせていただき、もう片方のコーチは一から十まで決めたことをやらないと気がすまないコーチで、私はその両方（のコーチ）を指導者になった立場の時に二つの良さをミックスして出来るかなあ、と思っています。最善を尽くすということと、あとは緻密に考え大胆に行動する。だから、体操の演技の採点が重箱の隅をつつくような0.1刻みか0.05採点のこともあって、選手や指導者は高い得点を得るために、0.1の加点を取るために努力していることを、審判は簡単に「ポンポンポン」と引いていきますよね。でもそれこそがやはり逆の立場からすれば、それを絶対に引かせないものを作り上げなければいけないということと、ある程度身につけて、それはボールゲームとか他の競技とかとは全く違うものなんですね。こうでなければ絶対にここまでいかないというか。例えば、内村（航平）選手と他の選手の違いというのがそこなんです。内村選手はちゃんとした軌道を通して、最高のパフォーマンスで着地まで持っていく時に（彼は）「美しい体操」という表現をしますが、それはまさに一般の人には分からない、審判にしか分からない、自分自身にしか分からないミスまでも彼は分かっているというのがよく分かります。なので、自分のこだわりは針の穴みたいなのを残すというのは神経質にやりますが、もう試合になったらそんなこと考えても仕方ないので、大胆不敵にやれということの指導が、私の中には生きて影響されて、選手にも練習の時にやったらとにかく試合の時には本当に思いっきり大胆不敵に楽しんでやればいいと思いますが、そこが中々難しいところですよ。

資料4. スポーツ現役時代を振り返って満足されていますか？（満足、という答えなら）それは、どういうところでしょうか？（不満足、という答えなら）それは、なぜでしょうか？

20歳代	私は、目指したところまでいけたのかかといったらいていないですけど、日本代表を目指していたので、自分で（海外の）プロの環境でサッカーをしてみたい今の自分の現状とか、自分の身体能力とかそういうことを考えた時に、選手としてひたすら26歳で追い続けるよりも、自分はセカンドキャリアにシフトしたいと思ってしまったので、今ここでスッパリ辞めてプロでしたという経験を使って次のステップに進んだ方がいいし、そうしたいと強く思ってしまったので、日本に帰ってきて（所属）チームを探とかそういうことはしませんでした。満足しているかと言ったら難しいですけど、振り返って中学校の時にああいうことをしていたらよかったなと思うことは多々ありますけれども、その時は自分の全力ではやっていたし考えられることはやった上でもこの結果なので、それも含めて実力だと考えると満足も不満足も自分の実力の範囲で出来る限りのことはしてここまでこれた、それでいいじゃないか、と思うところですね。
30歳代	高校までのバレーボール競技（生活）も大学以降のサッカー競技（生活）も両方満足していますね。バレーボールも精一杯やりましたし、ある程度成績も後輩に残して引退したという形なので、サッカーもいまでもそれこそ友人関係は繋がっているの、福岡大学に行って（サッカーをやれて）良かったというのは心底思いますね。たまたま、旦那も見つけたという感じですね。（高校までの）バレーボールはもう限界だと（自分で）思っていたんですよ。バレーボール部の監督も、先輩がほとんど日体大に進学されていたりとか、あとは系列の大学がちょうど強かったの、そこにそのまま行ったりかして、バレーボール部の監督が担任でもあったので「体育系の大学を考えたらどうか」みたいな感じで言われて、（それは）イコールバレーボールを続けるという意味だったのでですけども、その時この身長でやはり通用しないというのが（自分なりに）分っていたので、ちょうど東京都の予選とかでもやはりベスト4になると（身長が）170センチ以上（野選手ばかり）なんですよね。それで、ほとんど通用しなかったのでもうこれ以上続けても例えば大学に（バレーボールで）行ったとしても、厳しいというのは自分でも分っていたので、そこで線引きしてしまって「結構やり切った」感があって、それが否定的に言うと「バーンアウト」症候群のような感覚ではあったんですけども、もうちょっと出来ないというような感じでした。それまでサッカーは、ちょっとだけ小学校の時にやっていた、中学校でもちょっとはやっていた学校のクラブ活動みたいな感覚なんですけれど、その時に何か自分がシュートを決めちゃったりとかするあのゴールする感覚を覚えていたのでその記憶がやはりずっと残っていて、あのゴールした瞬間がバレーボールの点数を積み重ねるとはちょっと違うということですね。
40歳代	満足です。自分の力をすべて出し切った、技術的にも勿論ですけども、たぶん自分のこれ以上はなかったのではないかなと思えるくらい、やり切れた全う出来たというのが満足に繋がったかと思えますね。スランプで辞めようと思ってしまったんですけども、そこで全うし切れてなかったからこそやはり続けるというところに至りましたし、そこで辞めなくてよかったなと思います。辞めなかったからこそ今の自分もありますし、世界トップ10やその前のダブルスでのNO.1になっていますが、自分の夢はシングルスでトップ10だったので、それが達成できたのはそれがあつたからかなあと思います。（スランプは25歳の時。）
50歳代	ほぼ、満足しています。環境といい、もし他の大学にいてああいう中でやっていたら、今日の自分はあったらどうかとか（考えます）。やはり最後は自分で決定をするわけですね。大学に（進学する時に）いろいろ勧誘があったときに、でも最後の決定は自分なんです。だからそれに対してあだこうだといっても結局はそれは自分自身への不満なわけですから、そういうことを考えていると、学生にも明日も死んでもいい生き方をしろという、笑っていますけど。

## 2. 指導者

資料5. これまでご自身が指導を受けたことのあるのは男性指導者・女性指導者ではどちらが多いでしょうか？またその割合はどれくらいですか？

20歳代	女性指導者と考えると、キチンと毎日のように教えて頂いたのは一人ですかね。男性指導者はその他という感じですかね。今まで結構指導者に会ってきましたけど、7~8人位は男性指導者で、女性は1人でした。深くかかわった女性指導者は一人ですが、他に2~3人とは関わっています。
30歳代	小学校、中学校、高校は全部男性の指導者ですね。バレーボールに関しては全部男性で、大学（のサッカー）は女性の監督でした。チームスタッフも全員女性でした。たまたま福岡大学はOGが大体そのまま面倒を見るというような感覚だったです。
40歳代	プロになってからは、17年間の競技生活の内9年が女性指導者で8年が男性指導者で半分ずつ位ですね。
50歳代	中学高校が私立の一貫教育の女子高校だったので指導者も女性が多かったです。そして高校の時に日体大出身の器械体操の先生が来て、まずそれが最初の男性指導者との出会いですね。大学になって、私の恩師は東京五輪の銅メダリストの三栗多仁子先生ですけど、その方から勧誘され強さに引張られて、その話を聞いて初めてすごくこの人に本当に師事してみたいと思って大学に来たところが東海大学で、周りに何もなくてすごい田舎に来ちゃったな、と思いましたが、施設は素晴らしくて（よかったですね）。そういう意味では男性（指導者）の方が少ないですね。その時にご主人も、男性の監督、コーチが男性だったのですが、その時女子が優勝するチャンスがあったものですから、ほとんど男性チームはほつたらかして女子を見ていただいたという経験があって、創設9年目にインカレで優勝して、全日本での団体優勝は私の現役時代は逃しました。どちらかという（指導者は）女性の方が8対2ぐらいの割合で圧倒的に多いです。但し、高校3年間は男性のみですね。

資料6. 女性又は男性指導者のそれぞれの特徴あるいはそれぞれの良さ、または良くない点があるとすればどのようなところでしょうか？

20歳代	<p>まず、女性指導者がいいなあと思う点は、女性に対して厳しいかなあ、と思います。練習メニューとかも妥協をあまり許してくれない。女性指導者は同性だから強く言えるのかなあと思います。ここまではやるべきでしょう、とはっきり言ってくれるのが女性指導者のような気が私はしています。あとは、話やすいですね。同じ女性ですし、何か身体の不調があった時とかも、何の気兼ねもなく話せますし、バイオリズムも話せますし、そういうのは感じていました。他は、感情が分かりやすいというか、指導者としてこの人は今こういう風に思っているんだろうなという感情も男性指導者と比べると分かりやすいですね。男性指導者がいいというところはこれと言って無いですよ。別に男性の方が知識があるとも思わないですし、男性の指導者がいやだっていう訳ではないですが、この部分だから男性がいいよね、という部分が私はいりてあまり見つからないです。強いて男性指導者であれば、後輩が男性指導者に指導を受けているのをみて思ったりするんですが「何でこんなに甘いんだろう」というところは思っていて、もっと要求すればいいのになかったりとか、褒に優しいとか、(厳しいことを)言えないかなあ、異性だからここまで要求したらいいのかその人も分からないかなあ、その男性の優しさが甘さに繋がっていないかなあ、と思う時はあります。その点女性指導者は同性だから「私もやっていただからやれるでしょ」という感じで言えるので、要求をキチンと伝えられる部分はあると思いますね。</p>
30歳代	<p>特に、これまで男性(指導者)が良いとか、女性(指導者)が良いとかあまり考えたことが無かったので、女性(アスリート)を見てくれる方であれば、男性でも女性でも(どちらでも良くて)中々男性でも女性を指導したいという風、そこまで真剣に考えてくれる男性はあまりいないので、あのどちらかという、言葉は悪いですけども不純な動機のある指導者は置いておいて、中々女子に熱心に指導をしたいというのは、どちらかという男性は避けたいですね。だから私は個人的には、女性のチームを見てくれる男性(指導者)がいてくれるのであれば、そこはむしろ否定するよりかは、歓迎していいのではないかなと思うんですけど、但し、女性特有の心の変化であったり、体調の変化であったり、そこをやはり(高校までの)バレーボール時代は、全く無視の状態だったので、今考えたら恐ろしいんですけど、でもまあ当時はそんなことを全く理解されない時代だったので、それこそ月経痛で休むなんて人は一人もいなかったの、そう考えると女性を指導する時は、ある程度寛容といえますか女子特有のものを理解したうえで指導にあたらなければいけないというのは、この歳になってやっと分った気がしますね。(女性指導者は)やはり良心的というか、話しやすい相談にのってくれるというのは女性だから言えることというのも結構多かったの、結構熱心に話し出すと2時間とか3時間とか熱心に寄り添って頂いたの、そこは女性で良かったかなあという気はしますね。</p>
40歳代	<p>女性指導者は、私は母が女性コーチだったのでちょっと客観的にみるのが少し難しくなるかもしれませんが、女性コーチは母しかいないので良かった点は、凄く細かくみられる、技術的にもそうですし、精神的なところの気づきというの、細部にわたって目が行くというのが女性の細やかさにつながるかなあと思います。良くない点は女性だからとかではないかなと思います。私にとってはそんなに良くない点は無かったからこそ多分9年間、スランプから現役引退するまでだったので、(自分の状態が)悪いところから良くなったのはやはり、女性コーチの指導力あってだなあと思います。</p>
50歳代	<p>(女性指導者の良さや特徴ですが)、後からも影響がある部分で、社会的に、歴史的、教育的、文化的背景など全ての影響が年代によって違うと思いますが、まず同性であっても、自分のプライベートや悩みを同性だから打ち明けるか、ましてや男性に打ち明けるかということこれは性差関係なく、それについては、自分はあまり悩みとかの解決というのは個人的なことは、自分で解決してきました。多少競技の技術的なこととか、試合に対する色々な部分ではこれもあまり性差は無いような気がします。だから、自分が女性になって初めて女子を教えるみて色々気がついたことが多くて、やはりこれは同性であるからこそ分かる事と、私はどっちも(男性的な部分と女性的な部分)持っていて、どちらかという考え方が男性的で料理の仕方も男性的で、グイと引っ張っていくのも大胆に決定するのも割とドーンと決めてしまいますね。ある時学生が私のことを「どんな人」と言われた時にその時答えた答え方が「いつも10メートルか20メートル先を歩き早くサッサと来なさい」という感じだということを書いていたのですが、あながち自分が考えているのと彼らが考えているのとやっぱり変わらなかった(思いました)。但し、やはり大学生を教えていると(彼らは)大人ですよ。考え方はほとんど子供じみていますが、やはり発育・発達の状態は女性ですから、その時の色んな生理学的なこととかは分かるので、それに対しての相談はしてこなくても男性に分らないが(女性)は察知できます。それからそういうことに及ぶ時もこういうアドバイスが出来るとか、あまり男性はそこまでは踏み込まないとか(あります)。例えば体重の問題などは、順天堂の男性のコーチが女子を教えていてどうしても、減量をして度を越えて減量して、でもこれを規制してどうこう出来るということは出来ないといっていましたね。私も最終的には、他人のことは出来ませんよ、ただしこうしたいためにはこうするんだ、というかなり色んなキツイ方法を取りながら、ただ最近はそのような問題も多くなるのが現状です。男性(指導者)は分かっているもそこに踏み込んでいいのかという遠慮とか、ハラスメントの問題もあるので、どちらかという私の方がそっちの方が無頓着で、男子学生にもある程度これやったらいけないとか、こう言っはいけないとか最近は大分気をつけますね。体育系の学生は一般の学生に比べれば、大胆に色んなことが言えて、摂食障害のこととか、月経のこととかなんだけれどもそういうことについては、やはりある程度じゃあどうしたらいいという相談には乗れますけれど、中々大学生は言ってきません。だけど何か(問題を)抱えていることは分かりますから察知できるので、そういう機関の違う先生とかに手を回して、やはりダイレクトには監督に言えなくても他の人には言えるという環境を作る、という利点が大学にはありますね。</p>

資料7. 日本においては、女性の指導者は絶対的に少ないわけですが、その要因はどのようなものにあるとお考えですか？

20歳代	<p>なぜ、女性指導者が必要なのか、というところがあまり皆さん分かっていないのかなあ、というのが率直な感想です。海外ですと「女性指導者いいよね、そうだね。だってロールモデルが増えるしさ」とか「ロールモデルが増えることによってより多くの子供たちが指導者になりたいと思うしね。」とかそういう議論になっていくんですけど、日本だと「女性指導者増やしたいです。じゃあ、何で男性じゃいけないんですか。」という議論にすくなくなってしまって、指導者自身も、男性も女性も指導者は実力があれば関係ないですよ、と女性指導者も思っているところがあるので、もちろんそれは大前提としてあります。だけど女性指導者が増えることによるメリットというものを議論していかないと、いつまでたっても男性でも女性でもいいよね、で終わってしまうから、その女性指導者を育てようというところに注目がいかないのかな、というの思います。それがどこからきているのかと思ったら、例え日本社会の男女平等の格差が、知らないところである格差が、どこの世界でも別に男性でも女性でもいいじゃない、という風に全部繋がっているのかなあ、と思います。</p>
30歳代	<p>(女性指導者は)モチベーションが跳かない面が大きいのと思いますね。本当に覚悟していないと後々、結婚とか出産とかというタイミングもあるかと思うんですけども、でもそれでもやれないことは無いので、そこをそういうことがあってもやり続けるという覚悟がないと中々厳しいかなあという気がしますね。私自身は全然(指導者を)やる気は無かったんですけども、(指導者になったのは)たまたまだったんですけどもね。でもこの先10年、20年やっていけるかといったらまたそれははっきりとは云えないので。</p>
40歳代	<p>今回の「女性コーチアカデミー」に参加して、やっぱり(女性の)皆さん「ワーク・ライフ・バランス」もそうですし、競技によっては凄く肩身の狭い思いをしていらっしゃる方もいるんだなというのを聞いて、やっぱり(スポーツ界は)「男性社会」なんだな、というの凄く感じましたね。母がコーチをやっていたので、ロッカールームひとつとっても、女性のコーチロッカールームが無かったりして、男性は(ボールを)打ったりするからシャワーはあるけど女性は無いみたいなのがあったりしたので、環境的にもフェアではないなというのは感じていましたね。</p>
50歳代	<p>これは日本全体のスポーツ界に限らないことに及ぶと思いますね。それはその背景には(先ほども述べたように)歴史も政治も文化も教育も全て(関係ある)ということです。最近本当に変わってきていて、アカデミーに参加された20歳代の方たちとも接触しましたが、男性もそうですし学生も年齢が18歳から22歳までのひとと接触しているので、本当にだいぶ変わったなと、最近本当に(世代の)ギャップを感じるようになりました。あとは、世界といっても全部行っている訳ではありませんが、アメリカとかの立場、例えば中国など共産圏の場合は国家公務員なのでほとんど男女平等で男女の差別が無いじゃないですか。性の差別もないし日本は(残念ながら)あるんですね。そういうのを、(海外の)外に出た時に感じて、日本手随分と閉鎖されているな、と学生の時にも思いましたし、でもそれをどうやって変えるのと云ったときに、例えば私が受けた教育は両親からもそうですけれど何かにつけて「女の子なんだから」という言葉は母親からの教育が家庭の中でも、学校の教育の中でもあって、それは結局は政府の色んなものもそうですし、政治家もそんなところに女性はいませんでした。最近でもその割合は(少ないし)、それイコールスポーツ界だと思います。</p>

資料8. そんな中、ご自身は「女性スポーツ指導者」である（又は目指している）わけですが、現在どのような苦労がありますか？

20歳代	<p>いま、指導の現場にそこまでは入っていないですが、将来的には大学の機関で指導に関わりたいという気持ちがあるので、(もし将来大学で指導すると考えれば) 収入があるのかどうかという不安が一番ありますね。それで生活していけるのかという不安です。女性が指導者になるという時に、特に高校の女子サッカー界では男性(指導者)が作っている派閥があるんですけど、その中に女性が入っていったときにそこに合わせなければいけないのかな? 自分がそこで生きていくために男性社会に自分を合わせていかなければいけないのかなというのは思いますし非常に嫌だなと思います。それが社会だと云われればそれまでですが、先日高校の時に指導していただいた先生と食事をした時にも、お酒の席でお店の従業員のの方に軽いセクハラのようなことを言っていたりするんですが、私はそういう中に入らなければいけないのかな? とか思いますし、その方たちとのネットワークやコミュニケーションを保つためには、どうしても男性が働きあげている社会の中にフィットしていかなければいけないのは不満だなあととも思います。今はだんだん女性指導者も増えてはいますが、やはり文化を創っている上の方たちはほぼ全員男性なので、だからせっかく若い女性指導者が増えていても「えー、ここに入って行く」みたいな話は良く聞くので、この人たちが居なくなるあと2~30年は文化は変わらないよね。というような同世代の女性指導者の声を聞くと、それで一步止まってしまうところはありますよね。例えば、サッカーで言いますと、B級からA級と級が上がれば上がるほどそういう人たちの関わりが増えていく中で、とりえずC級持つていけば子供たちには指導できるし、ちょっとそこに入って行くのは嫌だしC級(のまま)でいいよ、みたいな人は同世代の指導者の中には結構いると思うんですね。</p>
30歳代	<p>一番は苦労といいますが、やはり目の前で怪我をした選手を見ると、練習の内容がちよっとまづかったかなというように、怪我って偶然ではないと思ってるので、その時大きな怪我をしたのを目の当たりにすると、練習量がどうだったとか(考えますし)、もう怪我をした部分は元には戻らないという感覚があるので、そうしたときにやはりその何日間かは引きずりますね。顔にはあまり出さないようにはしていますけれど、女子に不向きな競技だと云われつつも、でもそれでも今「なでしこチーム」が活躍してくれているので、ある程度体養とか疲労とかの面で、今は色々知識がすぐ持てる時代なので、ケアの仕方とか色々含めて練習量とか問題あったかな? とか考えて(選手の怪我は)それがやはり辛いんですね。4年生で大きな怪我をするというのがもう響きすぎて、復帰が早かったかなとか、色々考えますねポジションとか、考えればキリがないですけど。</p>
40歳代	<p>今は無いです。まだ正直、単発なコーチングはしていますけれども、しっかりと腰をすてははまだスタートできていないというところから、その世界に入りきれていないからこそ、問題にもぶち当たっていないというのが正直なところですね。今後、ジュニアを教えるにしても、トップレベルを教えるにしても違った意味でのやりがいはあると思うんですけども、上のレベルではやはり自分が経験したことプラス、いま大学院で勉強したことや女性コーチアカデミーで学んだことが生かしやすいかなと思います。ある意味低レベルだったら、誰が教えても同じ効果でしか見られないけれども、やはり高いレベルになると自分の得手の部分が出るというチャンスはあると思うので、そういう意味では自分にとってはそのレベルでもやりがいが的には変わらないとは思いますが、ニーズとしても多分上のレベルの方がいるのかなあ、とは思っています。</p>
50歳代	<p>(苦労は)あまりない気がしますね。女性コーチアカデミーに参加したり、色々なことでそういうことが声高らかに、この20年ぐらいでしょうか。若いころの方が(苦労は)沢山ありました。やはりそれは若かったがために、やはり(自分が)尖がっていたのかなあと思います。でも丸くなった訳ではなくて、むしろ協調して男性であること女性であることをもっと享受してうまくやれる方法が今は段々見つけられるとか、そういうことを今はやっているんじゃないかなあ、と思います。時代の変化という点では、例えば、自分が20歳の時にこういう状態であれば、多分すべて手に入れちゃっているなあ、と思います。悩まなくてはいけないというどっちかしか選べないという選択に性差があったと思います。今であれば迷わず全部やっけますね。(例えば)今の時代に、日本代表になった選手はどれほど恵まれているかということとか、(私のころは)ナショナルの選手になっても遠征に行く時も、自分のコーチは行かないでナショナルでコーチは決まって、突然羽田空港で集合して行った、そして1ヶ月ぐらいで3回も試合をやったというのが私の初めての海外遠征で「この人たち私のことをどれくらい知っている人たちのな?」という疑問暗鬼から始まりますよね。それで声を掛けてくれるひととひととが受け入れられないんですよ。やはり自分の恩師がいつも言っている技術的な指導とかとも全く異なるし、自分もある程度考えてやってきた人間なので「何言っているのかしら」という「日本の指導者ってこれしか分らないの」ということが、男女に限らず(ありました)。あとは自分が(指導者として)やってみて、仕事しながらやってきて家に帰った時に「風呂、メシ、寝ると云いたい」というのをずーと思っていました。今でも思いますが、今は自分が出ることは出来る、でそれで相手にもそれを求めなくていいや、自分が出る。そういうパートナーシップが出来る人を探せばいいだけけど、そういう時間さえも無いので、今はそういう人たちの集まりが結構あります。多分(私の現役の)そのころには男性は女性はこのあるべきという、ですから体操の(男子選手)の奥様が同じような立場でやってきた人は誰もいません。みんな家庭で子供を育てて、かなりまだそういうことがスポーツ界に残っていることが多いと思います。もし、自分もそうだったらそうしてもらいたいと思うのは全く男性と同じ考えです。それは男女の差は無いと思う。但し女性は子供を産む時のそこが最後は、女性のコーチ、アスリートが一番悩むことだと思います。私は経験が無いので(全く)云えませんが、ただし回りを見ていたり自分の卒業生だったり(をみてると)、ああこういうことを整えてあげたりしたらこの人たちも活躍出来るんじゃないか、というのが少し分かるようになってきていてそれで小笠原先生方(の主宰されている)ああいう場所に初めて足を踏み入れて、ああこういう人たちとちょっと早く知り合えていたら自分が積極的に行っていけばもっと解決したことがたくさんあったのになあ、というのが唯一心残りかなあと思います。</p>

### 3. 女性コーチアカデミー

資料9. 女性コーチアカデミーに参加して2ヶ月以上経ちましたが、参加されて何が良かったと思いますか？印象に残っているプログラムやその内容について教えてください。

20歳代	本当に全国各地から、様々な競技スポーツや分野で活躍されている様々な年代の方たちと一同に会して「女性スポーツ どうしていこう、女性指導者 どうしていこう」という会議というコミュニケーションをとるといのはあまり無かったので、その点に関しては大変勉強になりました。良いネットワークも作れたなあという風に思っていて、(今後自分が)何かやりたいなどかしたいなあと思った時には、こういう方々に声を掛けて、自分の悩みとか相談できるのかなと思えたので、それは非常に大きかったなあと思っています。プログラムは、だいたい全部面白かったですけど、高倉麻子さんのサッカーの話とあとは一番最後の「ダイバーシティ」の話、他は「DISC(行動分析アセスメント)」とあとはマリンさんの「女性のリーダーシップとは」という4つは結構良かったですね。例えば、DISCでの結果は的を得ているなあと思いましたが、DISCの面白い考え方だなあと思ったのはそれを別に何が良い何が悪いとかではなくて「あなたはそういう人だ」というのをきちんと4つの方向から理解して、相手に対してこういう自分を持っているからどう適応させなければいけないのか、ということが解ったのが、楽になったというか自分らしく居てよくて相手の状況によって少しずつ変えていけばいいということだけなんだなというのは発見でした。私は、指導とか指示とかの赤が一番強くて、ルールを守るというところがすごく一番低くて、まあその通りだなあと思いました。海外に行くことも、まず自分で思ってしまったらルールは抜けてしまってもいいや、みたいなそういうところがあったのでそう思いました。
30歳代	元々私は柔道の山口香先生の講義が聞きたくて(参加しました)。新聞とかでも結構読む時に目にすることがあって何か共感出来る部分があって、山口先生も女性を支援して女性をもと前というように第一線で、色々男性と戦っているというか戦うというか共有しあいながらという感覚があると思うんですけども、結構響く言葉を新聞とかテレビとかでもあとラジオもされているんですけども、目指すべきというところに置いておくべき存在として共感できる部分が多いので、山口先生の講義が聞けるのであればというような感覚で(参加しました)。山口先生の講義は深くよくて参加してよかったと思いますね。それが参加したい大きな理由でもあったんですけども、でもそれプラスアルファで鈴木志保子先生の栄養学とか、鈴木先生は実は元々別の仲間で作るパーティとかそういうのでは面識があったので、改めて講義(受けるの)は始めてだったんですけども、(他の講師の方々も)そうそうたるメンバーだったのでこんないい機会はないという(ことでした)。心理学系のことも多かったですしコーピングとか、そういった面も深く勉強になったので(自分にとっての)プラスアルファが大きくて、最初の山口先生のいうところプラスアルファが深く大きかったんで、期待以上で本当に受講してよかったと思いますね。あとは、事務局のメンバーは知り合いだったので、このメンバーが主催してくれるのなら是非にも行きたいという感覚がありましたね。
40歳代	全てのプログラムがすごく充実していたので、はじめはどういったものになるのかなあという感じでイメージはあまりしていなかったです。(プログラムの中で)面白かったのは「DISC@ (行動分析アセスメント)」だったり、メンタルの「コーピング」もそうですし、「コミュニケーション」のプログラムとかです。一つ一つのプログラムが新鮮だったので、2日目は盛りだくさんではあったが結構充実した時間で長いなあとはあまり感じなかったですね。
50歳代	やはりワークショップが良かったですね。DISC(行動分析アセスメント)のこともそうです。自分のコーチの在り方とか、人間そのものなどそういうことにも及んで、自己発見というか何にか(自分のことを)分かっていたようで、それを認めたくない部分とかをあそこをちゃんと(自分で)受け入れてやればいいんだとかという「素直さ」みたいなものが(良かったですね)。だからこれを若い人たちがその時に会えて、よかったね!みたいに自分も含めてですけど、そういう色々なワークショップなりそういうことが、現役の選手だったり(競技を)始めたころの何だか分からないで(いました)。自分の恩師がロールモデルですよ。でもあるときそれさえも違うんだということが分かった時期がやはりあって、あとシャドープレッシャーという、そういう話をした時にアメリカのコーチから言われて、自分の恩師や自分の理想としているコーチはこの人だという、ことを思っていることと自分が違うんじゃないかというのを、そういうことから「そうだ、私はこの人にラビーズじゃないけれども、違うんだ」と「私、違う人間で違うやり方があるしということ」に気づいてからは、肩の力が抜けたというのがあることがあってそれが今回のこういうことで、色々な項目別のプログラムを研究されて、そういうところにも自分はこういうところが強くて、足りないところは努力はするけど、全部パフォーマンスに行く必要はあるのかなあというのも含めて、努力をするためにものすごく悩むよりも、それは欠点としてほったらかしにしないということにここでは(女性コーチアカデミー)では出会えて、これを自分自身だけではなくやはり教育の場面で、何とか広めていくというところでのきっかけが買えて良かったです。

資料10. 2泊3日の合宿期間中、プログラムの合間などに他の参加者とどのような話をされましたか？

20歳代	私はルームメイトが、視覚障害の「ゴールボール」の日本代表選手だったんですけど、これまで障害者スポーツに触れる機会がなかったので「どういうことをやっているんですか?」とか「どうやって選手と仕事を両立したりしているんですか?」とかそういうことから、あとは同年代の人たちと(例えば)ボート選手と話した時は、その人は指導者になりたてだったけど2020年に向けてどういう風にしていきたいとか、夢みたいなものと一緒に語り合うことが出来て良かったなあと思います。あと、マイナススポーツの方もいらっちゃったので、ブリスビーの方とかですね。普段メディアにも中々出てこない競技だったり環境を実際話していて、女子指導者はどれくらいいるんですかとか女性スポーツはどうなんですか、いうこともダイレクトに聞けたというのは大きかったですね。
30歳代	ネットワークはもう皆で夜雑談ではないですけど、色々な現場の話をしたりとか、あとは結構参加者の中の減量目的とした話をしたり「どうやって」とかそこが盛り上がりましたね。
40歳代	子どもが一緒だったので、他の参加者とはほとんど話ができませんでした。
50歳代	つまり、こういう(参加者)の人たちと(一同に)出会えたことと自分が初めてだったので、何て自分は今まで小さい世界にいて独りで悩んでいたりと、ネットワークも無くてやっていたらどうとか(思いました)。例えば同じ大学の中でも同じ女性の監督がいなかったんで、男性にこんなことを話したって分からないよ、ということ(これまで)きたので、そういう意味では今回のあのアカデミーとか、こういうワークショップなりという参加することが、この前は、抜粋された人の中だったけど、もっと末端の人はいっぱい知りたいとか、もっと目から鱗とか(あると思うので)まさに末端の人に知れ渡るというのが必要だと思いました。だから出来ることはまず自分の所属している大学のコーチを目指すあるいはアスリートたちに授業の中でも出来るだけ(伝える)、それやるにはもう少し自分もちゃんとした伝え方が出来る方法を知らなければいけないと思います。



資料 1.1. 他の参加者に対しては、全体的にどのような印象を受けましたか？

20歳代	エネルギーが豊富な人が多いなあ、というのを感じて、あとは意思を（強く）持っている人が多いなあと思いました。もちろん（コーチアカデミーを）専攻されているのでそういう方が集まっているのかもしれないですけども、やはり厳しい環境の中で選手や競技のために奮闘されている人ばかりなので、指示待ちな人たちではなくて自分でどうにかしなきゃ、と思っている人たちがすごく多いなと感じました。だからこそ、いろんな人の話を聞きたいと思っている方も多いのかなあと思って、とても刺激になるというか、エネルギーで何か変化を起こしてやろうと思っている人が多いのかなあという気がしましたね。
30歳代	自分よりも年齢を重ねている指導者、多分40歳代、50歳代の方々というのは、やはりどっしり構えているというか経験値というもの、どうやってこのアカデミーとかで勉強して知識を蓄えたところで、やはり年齢を重ねて分の経験値というのは、なんかちょっとそこには敵わないんじゃないかなという気はしましたね。その20歳代の若い時のコーチでこれだけの知識、アカデミーでの知識を蓄えたうえで指導するというのも勿論すごく有利というか、私が20歳代の時に比べたら断然有利だと思うんですけども、やはり経験値を重ねたものというのはやはり机上のものとは全然違うのではないかな、と思いましたね。
40歳代	こういったセミナーに参加しようというだけあって、すごく前向きでしたし、女性ならではというか、向き合い方でしっかりと自分の意見を言ったり、あとやはり競技者を経てコーチをやられている方とそれほどの競技者ではない方も多分いらっしゃったと思うんですけども、やはり凄く信念を持って、スポーツを通して人間力を高めたいとか、そういった人間を作りたいとかいう方がすごく多かったので、皆さんの意識のレベルが高いなあという風に感じましたね。
50歳代	皆さんが悩んでいることは同じなのかなあとか、それぞれの競技の団体の中での悩みや、やはり閉鎖された中で、彼女たちもそういうことが、こういう人たちと知り合えたことが良かったというところから始まって、本当に世界がふわっと180度（ひらけて）、馬車うまのこういう感じだったのが多分（変わった）と皆さんそういう思いだったと思います。あとは、知らない世界（身体障害者）の人たちのそういう取り組みや、私たちはひとつは健常者のスポーツをずっとやってきたので、でもこれからそれをじゃあそういう人たちのために何が出来るかという、その方法すら（知らない）。やはり大学で色んな資格を取ってきたのもそこではなくて取ってきたので、そこを今その世界に自分たちは行けないし行くとも思わないんですが、そういう人たちとそういうコーチたちと知り合って、健常者にもそのアプローチが出来るとか、ということでは「ゴールボール」や「色々な車椅子の競技」やそういう人たちが「オリンピック出場が決まった」というのを見ると、今まででは知らなかった、まあニュースの中で（のことだったのが）が今度は身近に感じるようになってそういうことも見ようと思うことが（後に）繋がると思います。

資料 1.2. 今回、プログラムを受講されて何か指導者としての考え方に変化が生じたと思われませんか？

20歳代	「気づき」みたいなものが多かったですね。私は、アメリカにもスウェーデンにもいって自分でも（女性コーチアカデミーに）興味があったし、海外でも論文を書いているような方々と話をしていたので、今回の講義の内容ですごく新しいことがあったかと云われたら私の場合はそうではなかったです。ですが、例えばダイバーシティの話の時に、アメリカやスウェーデンでは当たり前なことなのに、日本だとホントにまだまだ初歩的なことから話していかないとそういう意識が無い人が多いんだなあとか、そういう「気づき」日本の現状と云いますか、日本の現場から離れていたんで、ああこういう感じなんだというのを感じたのかなあというように思っていますね。「ダイバーシティ」も「女性のリーダーシップ」もそうですが、スウェーデン、アメリカ、ザンビアもそういう女性のエンパワーメントということ云っているんで、そういう国に比べると、常識的なロールモデルが増える当たり前にいいことという（日本以外の）他の国では議論されていることを、最初のスクラッチからやっていくということがまず日本のスタートなのかなあというのが非常にびっくりしたという感じがすかね。
30歳代	大きな変化はあまりなかったんですけど、やはり実践女子大学でサッカー（の指導）に携わっている中で、学生も子供がいるというのは理解してくれているので、とにかく自分の精一杯の時間の許す限りで指導をしていくというのを、最初からそういう制限のある中で指導をするというのは分かっていたことだったので、特に講義を受けてというのは特にはないですね。
40歳代	今まで、あまり自分が女性だからとかで肩身の狭い思いをしてきてないんで、あまりこう「女性コーチアカデミー」みたいに、なにもそんな女性だからとか男性だからとか区別しなくていいんじゃないかという意識の方が強かったんですけども、ただ、でも今回の女性コーチアカデミーに参加して、女性だからこそシェアしやすい時間帯だったなあと思うので、これはこれであっていいなあと思いました。プログラムの内容とかがすごく充実した内容だったと思うので、逆に女性スリートについても男性コーチがしっかりと学ばべきだし、そのあたりの少なくなっているとはいえない古い体制だったりする競技もまだまだあると思うので、そういう意味では、その垣根とかをとりわけずにやっていかないとスポーツのステータスというのが中々上がらないんじゃないかなあ、というのはいちよと感じました。
50歳代	今回のプログラムの組み方やセッティングのされ方が、まさにああこうやって小笠原先生がプログラムを組むあるいは運営をする時に、やはり外国仕込みとかそれを日本でドンドン取り入れて素敵な、ひとつは参加したいという「素敵さ」があるんですよ、これは大事だと思います。あの男性（指導者）だってきつと、そういうセッティングされてそういう世界に踏み込んだら、自分も行きたいなあ（思うと思います）。これはアスリートにしても、だから今回「クロバット・ロックンロール」もそうなんですけど全く未知の世界に行く時に、私はじめてやる時に学生を連れてアメリカへ行った時もまず危険じゃなくて安全で一番いい部分を見せたいと、そうするがまた彼らは行きたいと思うし、次に違う所に大学院生を連れて行った時にやっぱり最高のものを見せて次に行ったところは最高ではないのですが、フィラデルフィアでコンGRESに連れて行ったときも街並みも違うホテルも取ってあげると、一番いいものを見せようとそれを比較しますよね。でもこれも全ての中であなたは何を選べるの、どういことを努力するとこういうところに行けるの、というのをあなたの人生の中でやはり学んでほしいと思うことがあるので、最初に確かに私たちは（日本）代表になるために苦しんでそれでその結果としてそれがあから、その喜びは本当に報奨金とかそういうことではない内面に向けた価値を生み出すことが出来るので、それが一番の人間力になるのかなあと思います。すべてがそうやって繋がっていくので一つの答えになっているのかどうかとは思いますが。

資料13. 受講されてご自身で何か変化がありましたか？

20歳代	私の場合は「気づき」が多かった感じですかね。例えば、ダイバーシティのことについては海外で私が自分で教えた小学校1年生の女の子に「お父さんとお母さんは何をしているの？」と聞いたら「私の家はお母さんと、お母さんです」と云った子がいたんです。なるほど、この6歳のこの子にとって「お母さんとお母さんのお家に住んで生きていく」ということは普通のことなんだと思って、私は自分の実体験で「何だ、この多様性」と思ったのがあって、その地域にいと当たり前なんです、そういう実体験をアカデミーでもみんなにシェアさせて頂いたんですけどみんなびっくりみたいな感じでした。私は実体験を通して、あるいは自分で研究論文を読んだりして、実体験していたのが日本はまだ全然こんななんだというギャップといますか。他の先進国と今の女性スポーツに対する日本の現状のこのギャップがなんて聞いているんだらうというのを（感じましたね）。
30歳代	自分自身、そんなに大きく変わったことはないですね。
40歳代	やはり、女性の身体のこととか、特に月経のこととかもそうですね。あと、「DiSC（行動分析アセスメント）」とかも、自分自身を（客観的に）知って、自分の持っているものとアダプトする（順応する）ということってすごく自分の理解が深まると、指導もしやすいと思いますし、自分にとってはすごく有意義だったなあ、と思います。（例えば）「ディスク」での自分のタイプはどれにも当てはまらずフラットな結果で、相手のコミュニケーションのところ、もっとリーダーシップを取っていかなければいけないのかなあとは思いましたが、意外な結果ではなかったですね。それを（客観的に）知れるというのは面白かったですね。
50歳代	（今回受講したことで、身体障害者のスポーツなどに）無関心ではないけれどもやはりどうしても自分の（大学の）現場があると、それを考えている時間やゆとりも無く、身近なものとしてやはり扱えない、テロにしてもそうですよ、実際外で見ていった時に実は身近にそういうことを経験しているので、フランスでも飛行機の乗り継ぎの時にハンバーガー店に入っていたら「爆弾が仕掛けられたという情報が入ったので皆さんどいてください」とテープが張られて、選手を一人連れていたのですが、私たちが乗る乗り場は向こう側なのに（通路は）シャットアウトされてしまうわけですよね。「えー、どうしよう」とでもそんな自分たちのことだけでなくいま違うことが起こっているんだと、「でも、私はこの選手をちゃんと日本へ連れて帰らなければいけないという責任も負っているのにテープを張られてどうしよう」とそうするとしばらくして他の通路でも行けないかなあと探しながら行ったけれど、しばらくすると本当にプラスチック爆弾が爆発して椅子とかが吹っ飛んだという小さい事故だったけれども、間近にそういうものを（見て）そして、警察官が一生懸命処理しているのを、皆さん危ないと言っているのを、日本の観光客はそれをバックにピースと写真撮っていたりして、その平和ボケというのはその頃かその後「9.11アメリカ同時多発テロ」もハワイで学生たちを連れてマリンスポーツの実習に行った翌日に、それをテレビで見てハワイはアメリカの領地なので、まず空港がシャットダウンされて20人近くどうしようと思ったけれども、全くそこは違う世界なんですよ。普通にプログラムもやって帰る頃には全部（無かったです）。但し、そういうことを見てアメリカ人の中にいてそういうことを感じた時に、日曜日はフリーデーだったのでですけどもインストラクターがクリスチャンで「明日、僕は教会に行くけど誰か行かないか？」と言った時に、なぜかいつもボーとしている空港にビーチサンダル履いて集合しているような男の学生たちも行くと言って、テロのこととか英語なんですけれど「皆さん、みんなのために祈りましょう」という初めてのメロディを聞いたらみんな泣いて、初めて家族や友達や色々なことを考えた非常に貴重な時間で、そういうことをこれに当てはめてみると全てが何かやはり繋がりますよね。そうすると、障害を持った人とかそういう人たちだって立派にスポーツをする権利や権限やそういうものが、（テレビ朝日の）宮崎さんを通じて彼女からかなり私も影響を受けて、今そういう活動をしています、やはり今自分が動けて出来ることは限られているので、でもこの中に小さい（自分の）キャパシティの中にもそういう部分も持っていることと、全く今までは入ってくる隙間も余裕も無かったことが、自分の中の引き出しの中にはちょっとボンと入れられたということは、大きな変化だと思います。

資料14. あなたが女性コーチアカデミーに参加したことは何人ぐらいが知っていると思いますか？

20歳代	私は、結構Facebookで発信するほうなんですけれど、そういうこともあるんだと思ってくれた人は知っていたかもしれないです。申し込んだ時は仕事が始まる前で筑波大学で勉強をしているときだったので、周りの人は「ああそうなんだ」とあまり興味がないのですよね。その時、あまり興味がないのかなあというのを感じましたね。
30歳代	アカデミーに行く前は、情報発信はしていないですね。行った後はフェイスブックで書きました。だから、行くことは家族ぐらいしか知らなかったです。
40歳代	新聞で見ましたよ、というのが取材を受けた時に言われたりしました。あまり、周りの友達とかには参加したことは言ってはいません。
50歳代	大学の同僚教諭や体操部員、学生及び友人知人など延べ人数で100人位

資料15. それは、どのような手段で伝えましたか？

20歳代	ゼミの先生に「女性スポーツ研究センター」がやっている「女性コーチアカデミー」に行ってください、と伝えたくらいです。
30歳代	行った後のフェイスブックの友達か100人ちょっとはいるのでその人達の中で80人位には伝わっているのかなと思います。
40歳代	あまり、自分からは友達とかには発信していないので伝えていません。
50歳代	全ての伝達は口頭によるものです。残念ながらFacebookなどの情報伝達手段は使用していません。

#### 4. SNSの利用状況

資料16. あなた自身、SNSに関してどのような考えを持っていますか？

20歳代	便利ですね。私は自分でFacebookであったりTwitterをなぜ私が使うのかというのは持っているつもりです。それは、自分が何をしているのかというのを発信したいと思っているからです。
30歳代	言いは悪いんですけど「暇な人がやる」ものだな、というような感覚はありますね。
40歳代	SNSとひとことで言ってもFacebookとかInstagramとかTwitterなど色んなものがありますが、私自身はものによって全然違う用途と種類があるなあ、とは感じています。今は時間的な余裕も無いこともあるし、元々持っている（自分の性格的な）要素もあまり（周りの人に）「見て、見て」とか「知ってほしい」とかそういうタイプではないのかもしれないですね。ですからあまり（自分から）発信は出ていないですね。
50歳代	SNSの意味が分からないので、後で調べるぐらいなのでよく分かりません。但し、Facebookは今一番使っていますね。毎日つないでいます。

資料17. SNSの良い点は何だと思いますか？また悪い点は何だと思いますか？

20歳代	良い点は、自分が発信してそれに興味をもってくれる人にか繋がればいいかなというのと、自分が興味があることに簡単に、早く情報収集する道具として使っているのが、そういう点で考えるとすごく便利ですね。悪い点というか注意しないといけない点は、どこまでプライバシーを発信するかということのは考えてしまいますね。自分の非になってしまうものも言ってしまったら広がってしまうとか伝わってしまうので、その練習を間違えると危険だなと思っています。
30歳代	良い点は今回のコーチアカデミーでも何人か繋がることが出来たんですけど、試合結果だとか（これまで）知らなかった、普段インターネットとかあまり頻繁に見る方ではないので、それで近況報告を見て共感できるというか、頑張っているからそこで私もがんばろう、みたいにはすぐにはならないんですけども「でも凄い頑張っているなあ」ということを知ることができるので、それで嬉しくなったりもすることがあるので、それは近況報告をして知ることは良い点だと（思います）。悪い点は、批判的なことを書く人はどうだろうといつも思いますね。
40歳代	（人と人が）つながる素晴らしさもあるし、それに付き纏う面倒くささというのもある。私自身はあまりマメな方ではないので、（マスコミなどで）仕事をしている割には自分発信がすごく少ない人なので、予告しなければいけないものも予告しないくらいで、正直もうちょっとうまく活用出来たらきつといいなあと思っています。
50歳代	情報の発信には注意しますが、入れ方は結構（注意します）本当はどちらも（受け取り方も）注意が必要ですが、自分の立場上とか仕事の主が、誰にでも学生とか卒業生でもかなり興味した友達にはならない、でもそれをどこまでシャットアウト出来るのがよく分からないで使っています。

資料18. SNSを利用されていますか？（利用されていれば）他に何を利用されていますか？

20歳代	FacebookとTwitterと、あとはブログも書いています。
30歳代	Facebookだけです。
40歳代	一応InstagramとFacebookは（発信がしませんが）持っています。
50歳代	使っているのはFacebookだけです。私は、自分のブログの何もやっていませんし、あとはメールです。学生は何かという私の知り合いでも何処行っても海外行ってもLINEと言うんだけど、LINEは私の中ではちょっと不信があります。

資料19. 利用しているのは、パソコンですか。スマートフォンですか？どちらでもですか？

20歳代	パソコンとスマートフォンと両方ですね。その時持っているものを使います。電車の中で見ることが多いのでスマホを使う割合が多いですけど、Facebookで何か投稿したりするときはちゃんとした文章を打ちたいのでパソコンが見やすいのでパソコンで打っています。割合は7対3くらいでスマホが多いですかね。
30歳代	スマートフォンが多いですね。パソコンではほとんどないですね。
40歳代	スマートフォンだけです。
50歳代	私は、受けたり見たりするのは携帯電話です。（打つのはパソコンです）というのはやはり目に影響があってあまり細かいところでもやるのもいちいち嫌だし、ひとつは打つ方法がやっぱり大きいキーボードの方がいいので、大体は自分から発信する場合はパソコンの方がいいですね。そうすると環境は限られます。オフィスかどこか外に行った時とか、あとiPadを持っていくとかですね。

資料20. 一日にSNSに接触している時間（LINEなども含め）はどれくらいだと思いますか？また、Facebook以外のSNSの何にどれくらいの時間を費やしていますか？

20歳代	7時間くらいは利用していますかね。平日は8対2くらいの割合でスマホが多くて、休日は家にいることが多いので7対3くらいでパソコンが多いですかね。
30歳代	また、Facebook以外のSNSの何にどれくらいの時間を費やしていますか。朝一回見て、あと夜ちょっと時間があつた時にちょっと見たりもしますけれど、朝、昼、夜にちょっとずつですね。トータルで10分くらいですね。
40歳代	一日の内で、見るのは5分以内です。（全く）見ない日もあります。
50歳代	また、Facebook以外のSNSの何にどれくらいの時間を費やしていますか。朝だけです。あとは自分の休み時間にチェックをしたりとか、トータルしたら1時間くらいですかね。朝一番にまず起きて早朝に向き合って、Facebookにチャットみたいなものがありますね。それでやって受けている時間は切ってしまうんですけど。

資料21. SNSを利用されるにあたって、特に意識したり注意されたりしていることはありますか？

20歳代	自分の情報開示をどこまでするかというのと、例えばタグ付けも出来るので自分と関わりのあつた人たちの情報開示も、これを云ったらその人の不利益になるかなとかいうことは一応考えます。子供たちの写真を載せる時はなるべく顔が見えないようにしたりとか、私の使っている目的がプライベートのこの情報発信というよりも自分のやっていることの発信で外に向いているので、その時に顔を見られたくないとか不特定多数の人の顔が限定されるような写真はなるべく控えようとかそういう配慮には気を遣っているつもりです。
30歳代	先ほど言ったように、批判的なこととか自分はこう思うみたいな自分の自己主張はしませんが。
40歳代	自分の名前では立ち上げてなくて、ただのウォッチャーですね。
50歳代	あまり、細かいプライベートに及ぶことには（踏み込まない）。「アクロバット・ロックンロール」に関しては、発信していますね。これは「広告」と同じだと思っているので、やはり広める、普及活動をしている立場上は、体操競技そのものは自分の本当のところは、他大学の某監督さんは毎日のように色々なことを書いてワー時間あるんだなあ。と現場を見る監督さんを一人採用したというのはありますけれど、ここまで私はやる気はないし、でもその監督さんが発信する有効な情報があるんですよ。競技の新しい情報とか、それは彼に限らず世界中から取り込みます。ですからそれは利用しています。

## 5. Facebook の利用状況

資料 2.2. Facebook を一日にどれくらい活用されていますか？（閲覧、いいね！を押す、シェア、書き込みなどにどの程度接触しているか。）

20歳代	SNSに接触している7時間中の内Facebookには6時間くらいです。
30歳代	先ほど言ったように一日10分くらいですね。
40歳代	登録はしているが、あまり使っていません。
50歳代	ごく限られた部分で接触しています。いいね！は簡単だからやりますし、書き込みは何をコメントするかによって大事なのでかなり考えます。どうでもいいことだったら、多少バツとやるけどそれによって影響されることに及ぶのは嫌だから。

資料 2.3. 使っている方は、何人くらいの「Facebook上の友達」が登録されていますか？また、Facebook良い点と悪い点は何かと思いますか？

20歳代	友達は850人くらいいますね。良い点は、文字（文章）が長めに打てるのとその文字と写真が同時に出てくるので、端的に何を言いたくて、どんなイメージかというのを伝えやすいのがFacebook良い点だと思いますね。悪い点というよりも注意している点は、私との関わりのある人をアップする時に、多分Twitterよりも、もし仮に私と関わりのある人の不利益になってしまうようなことを（私が）やってしまった時に、Facebookの方が広まりやすい危ないなあと思います。Twitterはそこで終わってしまうが、私がタグ付けしてしまったとすればその人のページにも誰が誰と何をしていたかというようなことが出てしまったりして、Twitterよりもネットワークが広がっている分（拡散しやすいのに）注意しなければならぬと思います。（自分の情報が見てもらえて拡散する表現の仕方は）Facebookは説明をしたくても、バツと見たときに最初何行かあってもっと読みたい時はリードもあけていくんですけど、そこまで開かない人はいるからその前の2~3行のところで、興味を持ってくれるとか、こういうことに興味を持ってくれる人がリードでも「いいね！」押ししたくなるような文章をつけておきたいとか、写真みたいなのはちょっと入れておきたいとかいう輩は一応考えていますね。
30歳代	100人位ですね。
40歳代	友達登録も20人くらいなので、親しい友達が今何をやっているのか、興味がないということと、Instagramもたまにしに使っていません。他の人に「メッセージ」というのが少ないかもしれないですね。
50歳代	個人的なやり取りをFacebookでやり取りをするのは海外の知り合いの方が多いです。新種目普及のために関係者と繋がったことで数は3桁はいると思います。良い点は、世界中にそういうやり取りが出来ることと、初めて良い点だったのは消息がつかめなかった友人や知り合いがいた、みたいな。あるいはその人を通じてそういう人たちに「生きていたんだ」とか私たちはそんな感じですね。だって、今の若い人たちは年賀状そのものも書かなくなっているし、私たちはまだそれがあるので私から（年賀状が）行かなくなったら死んだと思ってねとか、お互いにそういうやり取りを最近するようになったという年代にそろそろ入りますね。もともとFacebookは誹謗中傷がないという部分で、じゃあ私はこれだということ始めたので、ところが最近はそのようになって何かそのルール上がずれてきている気がするもので、良い点はやはり本当に（情報を）一瞬で世界中に広めることが出来ること、但しこの情報が受け取る人を選ばなければいけないとか、誰の目にも入るという点では良い点だけれど、（悪い点は）見てほしくない人や見たくない人もいるんだろうし、私のところにも要らないや、繋がったために入ってくるのが邪魔でというのがありますから、いま利点と欠点を言いました。

資料 2.4. 使っていない（あまり使っていない）という場合はなぜでしょうか？では今回の「女性スポーツアカデミー2015」が開催されたことなどが、Facebook上にアップされたのはご存知でしたか？

20歳代	よく通っているので、Facebook上にアップされているのは知っていました。
30歳代	フェイスブックで情報発信されていたのは知っています。
40歳代	多分、今は積極的にSNSを活用しようとは思っていないですね。積極的にやろうと思えば、時間は多分作ると思います。
50歳代	どちらが先かという、まずはそうではない部分から（情報が）入ってきて、Facebookだったんだということですね。逆に知りましたね。

## 6. プロモーション活動

資料25. このような活動を広くお知らせするあるいは普及するためのプロモーション活動には、今後どのようなことが大切だと思いますか？

20歳代	<p>多分、私のイメージですと女性指導者に「女性コーチアカデミーをやります」というと、興味ある人は興味あると思いますが、そこに男性は含まれていないので男性は全然興味が無いことになってしまうと思うんです。では、これやることによって「男性にどんなメリットがあるんだ」みたいなところを含められると変わるかなと。今はここに人たちがここに向けてプロモーションしているという感じですけど、それをもう少し広げると「やっぱり女性指導者って必要だね」という話が出てきて、そこの草の根の部分の「女性コーチは必要だ、自分たちもメリットがあるし」というようなところが、今度は上（の人たち）を動かしていくことになるのかなと思います。「女性指導者」というキーワードを多く出せば出すほど、何だか余計に近寄りたくなってしまおうと（私は）思っていて、でも誰かが言わなければいけないことなんで、それを言うのも必要だし、ただそれをするのもっと他の人たちの生活であったり、病気・疾病が軽減されたりとか、そのところをもうちょっと旨く伝えていかないと難しいなあと思うし、あの人たち変なグループで終わってしまうと思います。私も「女性スポーツ」とか「男女平等」とか興味あるので、そういうものをFacebookに上げますけれどきつと中には「何でそんなことばかり言っているの、フェミニズムか、フェミニストか」みたいに思っている人は自分の友達にもいるんだらうなと思っていて、でも私がやりたいのはそうではないけれどその主張もしないといけないから今は自分の媒体を使ってしているというだけで、あとは関係ない人たち、興味が無い人たちがどう巻き込んでいくか、どう興味を持ってもらうかということ是非常に難しいとは思っています。エマ・ワトソンさんが、国連でスピーチした時に新しいフェミニストの概念みたいなことを話していて「女性だけがよければいいじゃなくて、別に男性だってリーダーシップを張りたくない男性もいるでしょう。でも女性の中でもリーダーシップが得意な人がいる。その両方を認めることで、みんなが自分らしく生きられる世界、自分の幸せに素直になれる世界になっていくんです。それを活動として私は女性の社会進出を掲げている」みたいな話をされていて、そういう方向性から攻めるのが重要だなというのは思います。</p>
30歳代	<p>各競技団体の協会とあと大学に発信して、ポスターなり何かしらの啓蒙活動が必要だと思う。ちょっとフェイスブックだけだと難しいですね、弱いですね。</p>
40歳代	<p>女性コーチアカデミーに関してのプロモーション活動に対しては、自分自身が（積極的に）取材を受けることだと思っています。新聞とメディアを使う（露出する）。（取材依頼が）来たものはそれだけ取り上げてもらうのはいいことだと思いますし、自分が普段から（SNSなどで）発信していないからこそそういったものしかないということと、普段からもうちょっと多様に色々外界へのコンタクトを自分から発信していればそれも使えるんでしょけど普段していないので…。今回は出来る限りの協力はしたいと思っていたので、時間を割いて（メディアの）取材を受けることはしています。</p>
50歳代	<p>Facebookとかは（私は）あくまでも広告として使うのであれば良いのではないかなあ、と（思います）。そこに個人の情報を取り入れないのであれば、あくまでもそうではない繋がりを考えて、自分のグループを形成するとかしないといけないのですが、それを設定すること自体がそんなことやっているくらい他のことをやらなければならないということもありますね。</p>

資料26. マーケティング用語で、周りの方々に強い影響を与える人のことを「インフルエンサー」といいます。ご自身もインフルエンサーのお一人であるわけですが、そのように言われることをどう思われますか？

20歳代	<p>そう云われることは有り難いことだと思います。私が発信することで影響力が何かしらに波及するのであれば、それは責任を持ってやっていきたいなあとは思っていますね。それと、私は「スポーツを通じた国際開発で男女平等に興味を持っています。」と云う言うことが（自分が発信する）そのひとつかなあと思っています。いま「スポーツを通しての国際開発」というのは結構だんだんとホットになってきている話題で、その中で「日本で男女平等とか女性のエンパワメント（人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を引き出させること）」をやっているところはゼロなんですね、それを自分が、ザンビアとかでの経験をしてきて「スポーツを通じた国際開発」で繋がる人たち、その中でも「男女平等や女性のエンパワメントに興味を持っているんです」ということを伝えていくということが宣伝に繋がるのかなあ、と思います。いま所属しているところの名刺だけでなく、個人の名刺も作って「私の自分の興味あることはこういうことなんです」ということをアピールしてやっていきたいと思っています。</p>
30歳代	<p>（サッカーの）監督として福岡大学で6年間くらいやっていたので、はじめは10年やっただけで（一人前）という感覚があったので、でもフェイスブックでの友達として後輩がいるので、何かしらの影響力はあると思っているので、だから敢えて自己主張とか考えを問うようなことはせず、自己完結というか、事実だけを伝えるように意識しています。</p>
40歳代	<p>選手時代からやはりパフォーマーというか、外に発信していく立場ですので、オンコートだけではなくて、やはりオフコートでの言動、自分の発すること、行動ということが責任あるということはそれは当たり前のこととして生活してきたので、引退した今も仕事上外側の人から見られる仕事ということは認識しています。</p>
50歳代	<p>私は、こういう通信に関してのインフルエンサーとは考えていませんし、そういう風に思われているとは思いませんが、狭い意味の繋がりの中ではきつとお互いにあると思います。それは体操競技で繋がっている人の何人かはそうだと思います。でも、もっと広い意味では「インフルエンサー」とは思わないですが、どこまでその影響力を与えているかということとその定義なり度合いによると思います。</p>

資料27. これまでの経験の中でご自身が強い影響を受けた「インフルエンサー」がいらっしゃればどのようなことに影響を受けたのか、を教えてくださいませんか？

20歳代	<p>順天堂大学の小笠原悦子先生とか、女子サッカーコーチの小林美由紀さんとかですね。あとは面識はないですが男子サッカーの中田英寿選手とかは、いつも発信の仕方も好きですし、興味を持つところも面白いなあと感じていますし勉強になります。他には(女子マラソンの)有森裕子さんの講演を聞かせていただいた時にカッコいいなあと感じました。</p>
30歳代	<p>両親ですね。全くスポーツに関係ない生き方をしている人達なんですけれど、でも父親はテニスをしていて、母親に限っては完全な運動音痴でダンスは好きなんですけれど走ったりすることはちょっと考えられないというようなそういう家族構成の中で(育ってきました)。でも父親なんかは要所要所で応援してくれて、一番は福岡大学に行く時に特に母親なんかは大反対で「何も言っているのかよく分からない」というような感じだったんですけど、でも父親は(私が)どうしても行きたいというような信念を伝えて、母親は最後の最後まで反対していたんですけど父親は最後は「まあ頑張ってこい」というような感じで「最後に、お金のことは気にするな」というように言ってくれたので、そこがちょっと大きかったですよね。(福岡に)行ったらいったで今度は母親がすごく熱心に応援してくれて、それで両親のために頑張らなくてはいけないというようなふうに思いましたね。</p>
40歳代	<p>一番はコーチであった母ですね。コーチとして一緒にやってくれたというのは大きなことではありますけれども、一番身近なことの人なんですけれども、母としてはなくても人生の先輩としてすごくエネルギーで、先見の明とか先々のことを見据えながら、芯がぶれずにやり続けているということがすごいなあ、と尊敬できますね。大学院に進学したのも母からの影響と紹介があったので、そういう自分のターニングポイントで色々なアドバイスとか(を買って)すごくリードして買っているなあ、という感じはありますね。</p>
50歳代	<p>50歳代 まず、この体操競技を始めるきっかけですが、競技自体は後から知ったことで自分が運動したりスポーツが大好きだったというそのインフルエンサーとしては、やはり両親であり(特に)父親なんです。うちの父親は全く競技をしているわけでもないんですが、スポーツとか身体を動かすこととか何か無いところからモノを作り出して遊びの道具を(作ったりしました)。例えば雷が降れば斜めに坂を作りソリを作り、そこから始まるんですよ。ソリ遊びを全部セッティングしてさあやれではなくて、そのソリだってダンボールで(作ったりとか)かなり色々な工夫をしている父親だったので、凄く影響がありました。私が男の子に生まれれば良かったと思っている父親だったので、遊びが男の子用で与えられるおもちゃとかも私はお人形とかそういうものがほしかったなあと思うんですが、独楽とか凧とか、羽根突き、バドミントン全てが、あと冬になればアウトドアスポーツで、冬になれば湖でスキーでとにかくそういうところに連れて行ってもらって、小学校6年生まではあらゆるスポーツをそれこそ父親から色々習ったという自分も一緒になって遊んでくれて、その時に逆立ちをするのは、ハンドスプリングも教えてくれるは、そういうのも見よう見まねでやっていました。そんな時にメキシコオリンピックの時に見せてもらっていて「このスポーツって何よ」という「何か、私がいつもお父さんに教わっているこんな遊び」それまでは陸上でもやろうと思っていたんです。飛んだり、走ったり、跳ねたりすることが好きだったので、それで、「This is it」と本当にこのスポーツだと思ってでもそれはやはり父親がそういうスポーツを教えてくれなかったらそこにも興味が湧かなかったと思います。そういう意味では父親(ですね)。その次はやはり中学校の時はじめての顧問がなんと団体徒士の日本代表を連れて行ったような物凄い人だったんですね。東京女子体育大学出身で。その先生が私のことをいつも「あなたはオリンピック選手になれるんだ、それが校則は破ったり、掃除をちゃんとやらないとかそんなのでどうするんですか」といつも怒られていたんですよ。ホームルームもいつも私は前髪をキチンと留めなくて、校則で前髪をキチンと上げておてこをあげなければいけない、それが嫌でいつも髪を垂らしていたら、校則を守らないと説教がはじまります。そうすると、あなたのためにいつもみんなクラブ活動が遅れていくんだから他の友達に怒られて、いつもその人は「ずーっとオリンピックに出る選手」だどずーっと言い続けて、でも始めてみた時に自分はそこまでいける選手になるんだらうかと(思いました)、目標はそうでしたけれど、それをいい続けてくれた先生だったんですよ。それで3年間でみんな顧問が変わって、そういう先生がすごく怖かったけれど、結局褒められるというよりも凄くそういうことでは影響を与えてくれた先生で、何人もの先輩はありましたけれど、高校の3年生の時の先生が塚原光男さんと日体大での同級生だった先生で、やっぱりそういう話も色々聞かせてくれて自分が動いて日体大の卒業してだから、何でも女子高に来るとということではコーチングを勉強してくれてきた先生で影響を受けました。あとは大学の恩師ですね、私を見出してくれたのが何と高校2年生でインターハイに行ったときに、あの小野清子先生を通じて池上体操クラブの先輩が高校にいたので、小野先生から三栗先生を通じて「あなたを大学で欲しいと言っていたわよ」というのが高校2年生で「欲しいってどういう意味だろう」と勧誘の意味が分からなくて、だって高校2年生で大学なんてどうしようと考えていて「東海大学ってどこにあるの」というところから始まって、でもはじめて東海大学というのが少し自分の中に意識をして、一緒に大学生と試合をする全日本選手権に2年生の時に出られて、東海大学を見たときに、ああこういう選手がいるんだと何か興味を、やっぱり技術的に何か違うと、今まで日体大しか知らなかったのが、そういう意味でその頃からこの選手が欲しいというところで、(先生が)審判をしていたので、なんとなくそういう意味では大学の選抜の時に、その先生の話聞いてなんと情熱があって世界を見据えているんだらうかと思って「もう東海大学に決めた」というのがその先生の影響ですね。</p>

## 7. 今後の課題

資料28. では、具体的に女性指導者をもっと増やすには「女性コーチアカデミー」のような活動のほかにもどのようなことをやっていく必要があると思いますか？

20歳代	多分一番は、女性指導者ではない人たちに「どう女性指導者が重要か」ということを分っていただくかということだと思います。それをやるためには、例えば（女性スポーツ研究センター）は全体の底上げをやっていこうとしていると思うんですけど、しかし文部科学省であれJISであれ「女性のトップアスリートの競技力向上しか考えていない」というところが（両者の）違いだと思っていて、底を上げるのを含めて女性スポーツの底上げをしなければいけないということの理解があまりされていなくてその理解から入らないと、結局一番伸ばしたいところも伸びないし、もしかしたらリオデジャネイロ五輪や2020年の東京大会で結果はボンと出るかもしれないけれど、ではそれが持続的な、永続的な発展に繋がるのかと聞いたら絶対にしらないと思います。
30歳代	私もどちらかというと（女性指導者の数の）絶対数を増やしてもどうかなあ、というのがあって、自分も子育て経験していますけれど、やはり行けない公式戦もあってりだとか中途半端に指導しているつもりはないんですけども、でもやはり大学生だから（それが）許されるのであって、これが中学とか高校の先生だったりすると、先生がいないで公式戦なんて絶対に出れないので、そういった面で男性に頼らざるを得ないことも絶対出てきますし、そのチームでずーっと指導者としてやれる覚悟なんてものは最初からあるわけではないので、選手が被害を受けてしまうというのが一番よくない環境だと思うので、それこそ女性であれ男性であれその時の選手に親身になって指導を、真剣に選手のために考えられる指導者であれば、特に男性に限らず女性に限らずということだと思います。
40歳代	自分が出ることというのは本当に限られたことだと思いますけれども、自分はメディアを通しての仕事というところで「発信力」というのは自分の口から発することが、メディアを通して広がっていくというチャンスではあるので、やはり自分の行動というよりは発言にすごく責任があると思います。それをいい機会にして使っていくという意識の中で色々なことを発言していきたいと思いますが、それには女性全体、女性をもっと輝ける場というふうになんかおっしゃって、色々飛行士に女性も加わるとか、新たに女性が輝ける場というのを意識しながら、（五輪の）エンブレム委員会でも、色々なアジェンダと色々な年齢とかバランスよく委員を選考するというところにも（配慮）されたりしているというのがあって、「女性、女性」と言っているんですけども、それが後付的な意味を成しているというよりは形だけでもやっつけていこうじゃないかみたいな、そういう形からでも（入って）その形が当たり前になって、本当に女性の良さというのが表れてくる社会になればいいと思います。
50歳代	本当に、私は今こういう立場で（大学）教育の世界に身を置いているので、そこの中の授業を通じてとか、ゼミを通じて男女含めて本当に小さいことから、スポーツの活動に限らず、男性と女性はいま日本の中ではどういう役割でやって、結婚をしないという人たちが増えて今の世の中でもっとないと思いますよね。その選択肢しかないではなくて二人が力を合わせていけばいいということ、やはりお互いにまず自分が自立するということが大事だから、そうするといいいパートナーにもめぐり合えて、どっちかが寄っかかるのではない関係を築けるようには、いまこの4年間大事だよ、ということをお願いしたいこと、私が出来るアプローチはそこです。あと身近な部分での教育も本当に、それを育てた親たちも変わっていかないと駄目ではないかなあと思うので、本当に身近なところ（です）ね。それとやっぱり「女性、女性」じゃなくて、男性が関わって（いくこと）、それから女性自身の味方とか、意外と女性が敵だったりするということを感じたり、目に見える足の引っ張り合いは女性はずいぶん多い。男性は違うのではないかなあと思います、もっとやはり地位とか上へ上がっていくためには。

資料29. 日本で、女性コーチの必要性をもっと理解し、知らしめるために必要なことはなんですか？

20歳代	私が個人的に思っている個人の媒体でやっていることは、海外の事例をなるべくわかりやすい感じで和訳してFacebookに載せるとか私が出来る範囲のことをやっているだけですが、日本の中というように考えてしまうと「だって、日本は困っているの？」みたいになってしまうので、いやこの世界は、世界の常識とは違うんだよということと、世界で女性指導者が活躍することで、こんなに波及が出来るんだとか、こういうことが問題になっているんだとか、海外の事例を逆輸入することによって、国際社会はいまこうなんだとか、そういう気づきみたいなものをもっと伝えていきたいな思っています。それは先進国ではなくて、途上国でもスポーツを通じた開発というので「男女平等」は絶対入ってくるキーワードですし、先進国のアメリカ、スウェーデンとかはすでにやっている、これから途上国もやっつけていこうという中で、何で日本だけがそこにフォーカスしていないのというのを伝えていきたいと思っています。
30歳代	（女性の体罰などは）個人差が大きいものなので、それこそ男性の指導者であれば男性指導者とそこに女性コーチが一人入ったりとか、あるいは男性コーチとチームのまとめ役の女性のキャプテンが声を汲み取って、男性指導者に伝えるというその関係性さえ築いていけば特に問題はないと思います。そこには女性のフィルターがあればいいと思います。
40歳代	あとは働き方とかもやはり女性は「結婚・出産」があり、男性のように100%時間的などころでは働けない時期というのがどうしてもあると思うんですけども、そうじゃないと駄目という仕事ももしかしたらあるかもしれないですが、そうではなくてフレックスに働ける職場というのも真剣に考えて行かなければ、また少子化問題にも繋がっていきますよね。それで「女性、ダメダメ」となっていったらまたバランスの悪い社会になっていくと思うので、民間と日本の政府自身がタッグを組んで、色々な開けた方向に持っていく必要があると思います。そういったことを頭に入れながら、（私自身、メディアを通して今後）発信していきたいです。
50歳代	男性の考え方は、これが当たり前だという「えっ、僕たち何も協力していない？」という普通の感覚がやっぱり男性にはちょっと欠けている部分がある。それで、女性はそれを男性のそこが欠落している部分を、女性が尖がって（補っている）という部分での今の割合の関係で、でも実は女性も逆に女性をもっと支援したり、応援したり、協力したりという理解が足りていないのではないかなあというのを、自分もそういう部分があったり、他人からそれを影響を受けたりで感じることもあります。女性自身、女性側がきつとあると思います。妬み、中傷、誹謗は絶対女性側にもあるから、他人って男性もそうですけれど、私は男性にも妬まれていたんだなあというのが、本当に後々になって自分が若い時には感じなかった色々な人生の経験の中で、何十年も経ってからは、同じ世界で指導をやっている友達や同級生とかがちょっとした言葉の端に非常に感じて、ああ何だそういう風に思っていたのかと。私は私で一生懸命努力した結果こうなったのに、凄く恵まれていていいなあ、違う、みたいなちょっとしたニュアンスが含まれているのを感じた時に「ああ、残念だな、がっかりだな、そうじゃなかったんだ。」と、きつとこれは女性もそういう風に思っている部分もあるだろうし、自分が他人をそう思った時に、まず他人のことを羨ましいなあと思う時点で、これが反面妬みになっていないかとかね、これがだから一緒に喜んでいけるようなその育ち方や、環境がもっとあったらいいんじゃないかなあ（と思います。）

資料30. 女性指導者を増やすために、今後どのような方たちの理解が必要だと思われませんか？

20歳代	女性スポーツ研究センターの活動みたいに、総合的にやらなければ駄目ではないか、というのを理解されている方が、そう少し政府組織であったり政府みたいな組織にいないと厳しいのではないかなというのを感じますね。いま、どうしても(日本の)スポーツ界で意思決定をしている機関が、男性の年配の方たちで、そこの方が決めることを素々と遂行するのがこの下の部分になってしまうので、どうしてもそこ構造というのが確固たるかなあ、と思います。例えば、地方レベルのサッカー協会の上の方のマインドをちょっと変えていこうか、Jのクラブのトップの理解を変えていこうかだと思います。私の個人的な解釈ですと、女性スポーツ研究センターがこういうことをやったというのは、今回の参加者の人たちが、そのことを(それぞれの)現場に落とし込んでいく係りなのかなあというのを感じています。係りなのかなあという理解はありますが、いざやるとなると女性スポーツ研究センターとの連動でやっていますという、繋がりがあるとみんなもやり易くなるのかなあ、と思います。
30歳代	やはり(男性)パートナーの理解は絶対必要ですし、実際に託児所とかそういうものがあっても、実際預けられなかったりするんですね。だからやっぱり両親に預けた方が自分の中でも安心ですし、かといって近くに両親がいらっしゃらない場合もあるので、普及していくためには一番はパートナーの理解が大きいかなあと思いますね。(私の場合)両親が近くにいるので助かっているのと、場合によっては(子供を)連れて行ってマネージャー面倒見、みたいなことですね。例えば、それこそ大学にそういう施設があって短時間でも遊べるスペースがあって面倒見してくれる人が一人か二人いてくれればそれに越したことはないと思いますね。それは全然違いますね。日本でもやはり女子大学でお茶の水大学だったりとかそういうところはすごいんですね。女性への後押しというか、調べた時にももちろん託児所はありますし、とくに昭和女子大学でも地域に根差して、地域の方の子供も預かる「ナーサリー」というのがあって、そういう地域貢献プラスそこに通っている職員だとか雇われれば学生とかにも手を広げて、預かってくれるというそういう大学って本当に素晴らしいと思う反面、全部の大学にあってくれたら助かるなあという気がしますね。
40歳代	今、安倍首相があれだけ「女性の活躍の場」ということを発言されているので、それを信じながら、もう少し「男性の年配の方たちの理解」が特に必要だと思います。若い人たちは少しフレックスになっていて、「(育児に参加する)イクメン」が増えてるように、育児にも参加したりという人が当たり前にはなっていないとは思いますが、それでも、やはり戦後の高度成長の時代とは違うと思うので、(男性の年配の方には)もう少しフレックスに対応して欲しいなあと思います。
50歳代	女性の指導者とか女性の環境という前に、(インタビュー直前の)今回(の海外遠征で)ヨーロッパに行ってスイス人のホスピタリティというか、ほんのちょっとしか居なかったのにあの人たち何でこんな素直で人に対してこんなに優しく出来るの自然体で。今回一緒に行くとにかく送り迎えは個人的にスタッフは、大会の運営もしなければいけないのにフランスまでいつも迎えに来たり送り迎えをしてくれて、最後の明日から本当に会場で(早朝の)4時まで(準備を)寝ないでやっているそういう状況になった時に「もうごめんなさいどうしたらいいの」と言われた時「大丈夫、タクシーで行くから」と。それまではとっかえひっかえで選手も明日ジュネーブで明日連れて行ってあげるからと観光まで、その時にその選手がやってくれて何か一生懸命電話してくれて、フランス人だった彼はスイス・ジュネーブの(地元の観光の)どこを案内してあげていいかわからなくて、一生懸命通話してくれてそれもそれですね。そうしたら噴水のそばに誰か怪しい素振りをしている人がいるなあ、と思ったら、もう一人選手が来て一緒に練習をしていた選手が来て、それは今回の世界チャンピオンになった人なんです。なんか怪しい素振りで「来ちゃった」みたいに。そしてここがおいしい、チョコレートはここだとかとか(一通り案内して)「それじゃあ、僕はこれで帰るからあと楽しんでね」と言って帰ったんですけど、4時間位付き合ってくれてそれが世界選手権のチャンピオンになって、「えー」って、それってどういうところからいったい(くるものなのか)自分も選手でやらなければいけないことがあってそれどころではないと思うんですね。自分が選手を抱えてコーチだったらそんなことやるなよ、という立場ですよ。そういうのを見るとなんだろう、主催者側というのもあるって受け入れを一生懸命なんだけど、でもね普段からそういう育ち方をしているんだなあと思った時に、日本にはそういうものが根付いていないという文化的な部分が、実は全てにおいて女性の指導者やアスリートでないところ、今日もやはり女性のあるところではそういう駆け込み寺みたいなところがあるけれど、離婚して子供を育ててどうしようという女性がいっぱいいる、それがヨーロッパに行ってフランス人は結婚しなくても非婚者でも子供をちゃんと育てていけるような体制があるという部分で、これ政治じゃないですか。政治だけじゃなくてそういう土壌なんだと。色々受け入れるために色々なことも起きますけれど、日本というのはまだそこが閉鎖されていて、そこに行き着いてしまうのかあ、と思います。だから私は私自身で本当に積み重ねて出来ることから、これを知らなければ知らないで自分の今までの通りで、ああそういうことだったのねと他人事だったと思いますけど、そこからまずそういう人たちを増やすことが大事だと思います。



添付資料 C

新聞資料

キーワードは「自立」と「分業」であるらしい。バレンタインデーに順天堂大学女性スポーツ研究センターが開いた会議のテーマは、どうすれば日本スポーツ界に女性の指導者が増えるか、だった。

バネルデイスカレッジには、そうとうたる騒ぎがもたらした。チニスの杉山慶さんとコーチでもある母の杉山美沙子さん(バーム・インターナショナル・テニス・アカデミー校長)、陸上の山下佐知子さん(第一生命女子陸上部監督)、バレーボールのヨコ・ゼッターランドさん

## 寝ても覚めても

重 圭 以子

「彼女が女子バレー部監督の、サッカーの小林美由紀さん(シエラ市原・千葉レジェンズ)も、断つておくれが、主権者も出席者も、女子選手のコーチは女性であるべき

だ、と考えているわけではない。実際、バネリストから「性差よりも個人差の方が大きい」とか「男女の差より、いいコーチと悪いコーチに分かれるだけ」との発言もあった。

## 「自立」と「分業」



「自立」と「分業」  
 多くの女子選手は、指導者の道を離れてほしいだけなのだ。とちかく、指導者としての苦別話、なまなまンバーが披露する、肩が一致したが、肩の二つのキ

手が固に残ったコーチをラマンスで連絡をとりながら練習しているのを、感じたという。  
 選手がすべてコーチ任せ、ハッたりの関係では、コーチの負担が大きいの。「あんなこと、とてもできない」と

疎中だ。ある選手のメインコーチを務めているが、シアーには基本的には関わらない。同行はアシスタントコーチに任せるし、チニスは「コーチとヘッドコーチは分けているので、一人ですべてを管理し込むことはない」という。  
 体調管理は医師やトレーナー、食事は栄養士、と専門家を任せただけで、監督やコーチの負担はかた減る。費用の問題はあるけれど、男性コーチにも、選手自身のためにも「自立」と「分業」は進めたいと思っ。

【専門記者 田原和宏】

## 女性指導者の将来像は

○2020年東京五輪・パラリンピックに向け日本の女性指導者像を考えるイベントが14日、東京都内であり、元プロテニス選手の杉山慶さん、バレーボールの元米国代表、ヨコ・ゼッターランド、嘉悦大女子監督らが参加し、意見を交わした。

○順天堂大が昨夏、設立した女性スポーツ研究センターの主権。母美沙子さんとともにバネリストを務めた杉山さんは「教わったコーチは男

性はかなりで唯一の女性が母。細かいところまで目が行き届き、適切な言葉を掛けてくれた」と振り返った。山下佐知子は、五輪代表選手のボーイング、男子スタッフが不機嫌になった話を披露。「男女の考え方の違いを感じた」と苦笑いで話した。

○討論では、結婚や出産などで悩む女性指導者の姿も浮かび上がった。この日はバレンタインデー。まだまだ男



女性のコーチングについて語り合う杉山慶さん(右)とゼッターランドさん  
 【田原和宏、写真も】

聞

(第3種郵便物認可)

順大がアカデミー開設

育て女性指導者

順大が昨年設立した女性スポーツ研究センターは、女性指導者の資質向上を図るための短期プログラム「女性コーチアカデミー」を開設すると発表した。同センターによれば、女性指導者に対する求められた包括的なプログラムは国内初の試みという。9月に長野県軽井沢町内で第一回を開催する。女性の指導者育成は、日本の大きな課題。アカデミーには短期集中での役割も期待される。

2014年ロンドン五輪、14年ソチ五輪では、日本の女子選手の数がいずれも男子を上回った。だが、「コーチとなれば女性の割合は一割程度とされる。結婚や出産が障壁となり、また家族や周囲の理解や支援が乏しいのが実情だ。女性の指導者増やそうと、米金米大体育協会(NCAA)の補助を受けて、「女性コーチアカデミー」を定期的に開催。昨年までの参加者は1700人を超える。

女性スポーツ研究センター長の小笠原センター長(左)、順大教授(右)と、講師・順大教授(右)と、参加者(左)の交流が盛んだった。日本では女性指導者を育てるべきと問われた。日本

資質向上へ初の試み

でも、決勝を出す必要があったとして、キャリア構築を支援する同様の試みをスタートさせることを決意した。

アカデミーは約3日の合宿形式。カリキュラムの内容は女性スポーツ指導者の実務に始まり、選手に対する体系的サポートや技術指導、仕事と生活の両立を図るためのワーク・ライフ・バランスを多岐にわたる。女性の指導者として必要な知識や技能を集中的に学ぶほか、参加者同士の交流を図り、ネットワークを広げるのが狙いだ。同センターは5月に詳細な内容や応募条件などを公表。6月から募集を開始する。

講師には、1988年ソウル五輪、シドニー五輪、アトランタ五輪、ベトナムでメダルを獲得した田中ウルヴェ京子(右)、2012年ロンドン五輪のオーストラリア代表、現任はメンタル指導者専門とする田中ウルヴェ京子(左)と、元プロレス選手の杉山慶子(右)をコーチとして支えた母の美沙子(左)をコーチとして支えた母の美沙子(左)と、日本の女性の仕事と家庭を両立させる取り組み、そして結婚や出産を人生経験と捉えること、指導者としてのメンタルケアと強調する。(田原和宏)

しんぶん 赤旗



女性コーチアカデミーの北條 麗子をモデルにしたロゴマーク

Women Coaches Academy

女性コーチ育成へ講座

初の試み  
女性のコーチを育てるための体系的な短期プログラム「女性コーチアカデミー」が、長野県軽井沢町で17日に開催された。日本での初めての試みだ。

講師は、小笠原センター長(左)、順大教授(右)と、講師・順大教授(右)と、参加者(左)の交流が盛んだった。日本では女性指導者を育てるべきと問われた。日本

コーチング・性格分析・体調管理学ぶ



小笠原センター長(手前右)から修了証を受け取り、握手する杉山慶子さんらアカデミー参加者=17日

北條麗子をモデルにしたロゴマークが、順大のシンボルとなっている。古来、航海の舵手と呼ばれたことから、女性が持つべきリーダーシップやコミュニケーション能力を育むという狙いがある。今後は継続して参加したい」と話した。

アカデミーのロゴマークは、北條麗子をモデルにしたデザインだ。古来、航海の舵手と呼ばれたことから、女性が持つべきリーダーシップやコミュニケーション能力を育むという狙いがある。今後は継続して参加したい」と話した。

講師は、小笠原センター長(左)、順大教授(右)と、講師・順大教授(右)と、参加者(左)の交流が盛んだった。日本では女性指導者を育てるべきと問われた。日本



Sports

## 杉山愛さん 指導者へ奮闘

### 大学院 研修会で勉強中

7月に第一子を出産した元プロテニス選手、杉山愛さん(40)が、本格的な指導者になる夢に向かって歩み始めている。9月には、世界を指導する女性コーチの育成を目的に開かれた日本初の研修会に参加。妊娠出産で現場から一度離れたことで、指導を「ライフワークにする」との思いが強まったという。

(原稿提供) 長野県軽井沢町で行われた「女性コーチアカデミー」は2泊3日の合宿形式だった。長身の悠ちゃん(仮名)は数時間おきの授乳が欠かせず、参加を迷ったが、夫が講義の間は世話を担う企画サポートを依頼してくれた。

母親になって「○○の男方、考え方が変わった。完全に親目線へ変わった。同時に勉強不足だったところも振り返る。

2009年に現業を引退した後、「ずっと」思っていたのが、何を教えられるか」と考え、目標は「自分」にあった。だが子供は女性性が湧出し、成長の早さも違う。「選手を育てる」は相当の覚悟が必要」と痛感した。4月に順天堂大学院スポーツ健康科学研究科に入学したのだった。

も、テニスの技術以外の「引き出しを増やしたい」と考え、今後は「男子の活躍が目立ちますが、女子も日本」の指導者になる。女性スポーツ研究センターは「女性のトップコーチが少なくない日本のスポーツ界を変える存在になれるはず」と期待する。

自分目線 出産経て変化



女性コーチアカデミーに参加した杉山愛さん

2015年(平成27年)11月11日(水曜日) 東京中日スポーツ 5面 20

# 小笠原悦子 女性スポーツ 信念曲げず突き進む

## 順大女性スポーツ研究センター長

### 「支援方策」を「研究」の視点で取り組む

#### 最重要課題は女性指導者・リーダーの育成

2010年、順天堂大学で女性スポーツ研究センターを設立した小笠原悦子(57)は、女性スポーツの発展を期して、指導者や選手を育てることに力を注いでいる。2015年9月に開かれた「女性コーチアカデミー」研修会でも、自身の経験や研究の成果を基に、指導者の育成について講演した。

小笠原氏は、自身の経験から、指導者の育成には「信念を曲げず突き進む」ことが重要だと強調した。また、女性スポーツの発展には、指導者や選手だけでなく、支援体制の整備も不可欠だと指摘した。

「支援方策」を「研究」の視点で取り組む。小笠原氏は、自身の経験や研究の成果を基に、指導者の育成について講演した。また、女性スポーツの発展には、指導者や選手だけでなく、支援体制の整備も不可欠だと指摘した。

最重要課題は女性指導者・リーダーの育成。小笠原氏は、自身の経験や研究の成果を基に、指導者の育成について講演した。また、女性スポーツの発展には、指導者や選手だけでなく、支援体制の整備も不可欠だと指摘した。

指導者を目指す32人が参加。研修会には、全国各地から指導者を目指す女性たちが参加した。小笠原氏は、自身の経験や研究の成果を基に、指導者の育成について講演した。

東京都の頑張るアスリート全力応援「たけなび」が、指導者を目指す女性をサポートしている。小笠原氏は、自身の経験や研究の成果を基に、指導者の育成について講演した。



# NBA NFL 女性コーチ奮闘



練習中、チームのエースガードのジョン・ロンズに指導するインディアナ・パシフィックのH.C.リバーマン



世界のあらゆる才能が集まる米国の男子プロスポーツ。その現地に、今季、女性コーチの姿が見られるようになった。プロバスケットボール(NBA)では、昨季に続き、史上初の女性コーチが生まれ、プロアメリカンフットボール(NFL)では、史上初めて女性コーチが就任した。米国の女性指導者に長く閉ざられてきた門が、開き始めようとしている。

女性では大柄な身長178センチ、25歳を越すNBAキングスの選手らと並ぶと、女性アシスタントコーチ(H.C)のナンシー・リバーマン(50)の姿は頭(1)以上低かった。11月9日、カリフォルニア州クラマートであった本拠での公式戦。リバーマンは、タイムの度にベンチ前で叫ばれる作戦会議に耳を傾け、試合中は選手らの「史上最高のスター」を

動きを密に監視した。仕事は、現場の最高指揮官ヘッドコーチ(H.C)の補佐役。選手のプレイングを分析し、H.Cの采配に役立つようにするのが、主な仕事の一つだ。今年7月、名将ジョージ・カール(H.C)から、コーチ就任を要請された。リーグ史上初で、チーム初のフルタイムでの女性A.C.リバーマンは言う。「この日のために、すべてを準備してきた。指導者に男女は関係ない。むしろ小さな一歩だが、歴史を変えるために努力を続けた」

## 「知識持って指導すれば 男女は関係ない」



カリフォルニアのエルトワールで練習する女子バスケットボールチームのコーチ(中央)リバーマン

「私は黒人でも大統領になれた。あなたが男性に教えることを普通と悪くない人もいるだろうが、その流れを変えて欲しい」。しかし、11年限りで辞任。仕事と、高校生の息子と過ごす時間の両立が難しくなったから。最後は、母である道を選んだ。現場への復帰を決意した

カールは約8年前、NBAで指しつけられる彼女も、NBAでコーチ職を得るには長い年月がかかった。18歳で出場した1976年のモントリオール五輪で銀メダルを獲得し、大学や女子フットボールで活躍した。男子の独立リーグでも2年間プレー。引退後は、女子プロチームでH.C.などを務め、96年に殿堂入りを果たした。2009年、NBAの下部リーグで、女性初のH.C.に任用された。オバマ大統領に面会を求められ、この言葉をもらった。

(拡大記事)

## 日本では… 取り組み徐々に

### 日本では… 取り組み徐々に

「コーチはスポーツを教えるだけですか。それ以外には何かありますか」そう問いかける米国の女性講師の言葉に、参加者の一人、元プロテニス選手の杉山愛さんが答えた。「ライフエクスベリエンス(人生経験)」静かにうなずいた講師は「コーチは人生で大切なことを教えます。社会的リーダーにならなければなりません」と言葉をつないだ。9月中旬、長野県井沢町で開かれた「女性コーチアカデミー」。女性指導者の資質を高めようと、順大が昨年設立した「女性スポーツ研究センター」が企画した。参加者は、杉山さんら元トップ選手や大学の女性コーチら約30人。同センター長で順大の小笠原悦子教授(スポーツマネジメント)は「日本に女性指導者が少ない状況を変えるに

米社会性別の価値観変化  
女性には、男性の超一流アスリートを教えられる必要はない。身体能力の違いは、多い。88年、アフリカ系出身のオバマ氏が大統領に当選し、当時、民主党の指名候補レースを争ったヒラリー・クリントン氏が、今年子プロバスケット選手のベッキー・ハモン(38)が、NBA史上初のフルタイムの女性A.C.としてスペースと契約。NFLでは、今夏、史上初の女性コーチが誕生した。ジェニファー・ウェルター(38)を、キャンプ限定の臨時コーチとして雇った。女性には、男性の超一流アスリートを教えられる必要はない。身体能力の違いは、多い。88年、アフリカ系出身のオバマ氏が大統領に当選し、当時、民主党の指名候補レースを争ったヒラリー・クリントン氏が、今年子プロバスケット選手のベッキー・ハモン(38)が、NBA史上初のフルタイムの女性A.C.としてスペースと契約。NFLでは、今夏、史上初の女性コーチが誕生した。ジェニファー・ウェルター(38)を、キャンプ限定の臨時コーチとして雇った。女性には、男性の超一流アスリートを教えられる必要はない。身体能力の違いは、多い。88年、アフリカ系出身のオバマ氏が大統領に当選し、当時、民主党の指名候補レースを争ったヒラリー・クリントン氏が、今年子プロバスケット選手のベッキー・ハモン(38)が、NBA史上初のフルタイムの女性A.C.としてスペースと契約。NFLでは、今夏、史上初の女性コーチが誕生した。ジェニファー・ウェルター(38)を、キャンプ限定の臨時コーチとして雇った。

MAINICHI

# 新毎日

12月4日(金)  
2015年(平成27年)

発行所: 東京朝日ビル(東京都千代田区一ツ橋1-1-1)  
〒100-0001 電話: 03-3212-4321  
毎日新聞東京本社

# 女性登用30% 政府断念

## 20年度目標分野別数値に

政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。

分野	現状	目標
国家公務員	3.5%	17%
都道府県職員	8.5%	15%
市町村職員	14.6%	20%
民間企業	9.2%	15%
警察官	22.4%	30%
地方警察	8.1%	10%
自治会	4.7%	10%
小中学校	15.2%	20%

※目標の期限は2020年度末まで

政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。

### リーダー育成不十分

政府は女性登用の目標を達成するために、リーダー育成に力を入れる。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。

政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。

政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。

政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野は、国家公務員(14.6%)、都道府県職員(8.5%)、市町村職員(9.2%)、民間企業(22.4%)、地方警察(8.1%)、自治会(4.7%)、小中学校(15.2%)などである。政府は2017年度から女性登用率を30%とする目標を掲げ、2020年度までに達成を目指す。しかし、2015年度の調査で、2020年度目標の分野別数値に達していない分野が複数あり、政府は断念した。